
高校生の恋。

黒蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生の恋。

【Nコード】

N5181C

【作者名】

黒蝶

【あらすじ】

高校1年生になった佐倉理子。なんとなく選んだ高校で、なんとなく行われた入学式での自己紹介で、室岡尚志の声だけが妙に耳に響いた。最初はただの友達。だけど、いつしか彼の事が好きになっていく理子。でも彼には彼女がいた。友達以上になれない微妙な距離感の中で、切なくもどかしいこの恋は、理子の高校生活そのものでした。

第1話 「入学式での君の声。」

「良い声」の定義なんて全くわからないけど、妙に耳に残って響いて・・・

ありふれた言葉を言うだけだったのに、何でもない声だったのに、何かが違うような気がした。
ただそれだけの事だった

私は高校一年生になった。

有名大学への進学率が高いわけでも、卒業後の自分の進路に
合わせて選んだわけでもない。

それなりに勉強すれば誰でも合格できて、尚且つ家から歩いて20分
程度で通える、何の変哲も無いただの高校。
志望動機なんてそんなものだった。

2

入学式を終えて、それぞれのクラスでは最初のホームルームが
行われていた。

クラスの担任になったのは平原先生といって、お腹がぼっこりと
出た中年のおじさん。

でも、笑うと顔に皺が刻まれておじいちゃんみたいに見える、
そんな人だった。

平原先生は簡単な挨拶をして、ホームルームの後に行われる教科書
購入の会場となっている教室への行き方や、翌日以降の日程などを
淡々と説明した。

ある程度のことは、予め配布されていたプリントにも書いてあった。
そのせいか、その時の平原先生の説明は薄ぼんやりとしか耳に
入ってこなかった。

一通り話し終えて平原先生は、自分の後ろの黒板の真上にある

時計を見上げた。

そして「ふう」と一息吐くと、時間が余ってしまった、と言った。
「せっつかくだから自己紹介でもしましょうか。」

おじいちゃんの顔で微笑んだ平原先生が言った。

今時、しかも高校生になって自己紹介なんて
きつと同じようなことを考えた人は他にもいただろう。

そんな心の呟きが顔に表れた生徒がいたのか、先生がふと溢した。
「もしかしたら、自己紹介をさせるために神様がいたずらをして、
時間を余らせたのかもしれないしね。」

神様のいたずら

それは平原先生の最初の教えだった。

「何を言うのか決まっていた方が紹介しやすいね。」

そう言うのと、平原先生は手元にあった出席簿を取った。

結果、出身中学校と名前、そして何でもいいので一言、自分の
アピールを言うことに決定した。

「それじゃあ出席番号順に、青木さんからお願いします。」
神様のいたずらにより、自己紹介は始まった。

ひとり、またひとりと自己紹介の順番が回っていく。

私はひたすら自分のアピールについて考えた。

趣味は何だとか、何の教科を頑張りたいとか、先に紹介を
し終えた人達はみんなそんなような事を言っていたので、
そんなものでいいんだと思った。

「です。よろしくお願いします。」

自分の前の席の人の自己紹介が終わった。

パチパチパチ　と疎らな拍手が広がる。

いよいよ私の順番になった。心臓が少し足早に脈を打つ。

「中出身の佐倉理子です。美術部に入ろうと思っています。よろしく願います。」

適当な拍手が舞う中で、私は即座に腰を下ろした。

心臓はまだドクドクと鳴っている。

「ふう。」とさりげなく溜め息をつくとき、自分の順番が終わったことの安堵感に私はしばらく浸った。

心臓が平常の速さに戻るまで、それほど時間はかからなかった。もともと気は進まなかったけど、言い終えてしまえば何てことはない。

そうしている間にも自己紹介は着々と進み、気がつけば廊下側からスタートしていた順番は、残すところ窓側の二列だけになっていた。

誰もが自分の事を知って欲しくて、趣味や目標を公表しているわけではないと思った。

そんな人中にはいるかもしれないけど、大半はきっとその場凌ぎ。自分がそうであるように。

少しずつ終わりへと近づく自己紹介。

窓側から二列目の、後ろから数えて二番目の席。私からは左斜め後ろの方になる。

その席に座るひとりの少年の順番になった。

「中出身、室岡尚志です。中学でサッカー部に入っていたので、高校でも続けようと思っています。よろしく願います。」

そう言って、彼が腰を下ろす気配が後ろから感じられた。

そして、軽い拍手があちこちから適当に鳴る。

彼の席を、顔を見ていたわけでもなく、ただ正面を向いたまま、

私も周りと同じようなそんな拍手をした。

だけど、自分の左斜め後ろ辺りの声が妙に耳の奥で響いて、何を言ったのかはよく覚えていないのに、彼の声だけが深く印象に残った。

自己紹介のラストは「渡邊」という苗字の人で締められた。

平原先生が口を開く。

「みなさんご苦勞様でした。今の時間が、誰か自分のことを知ってもらったための、誰かのことを知るための一歩となるといいですね。」

先生は出席簿に何かを書き込みながら言った。

最初のホームルーム終了のチャイムが、静かな教室に響き渡る。

「それでは今日はこれで解散となります。教科書購入では買い忘れが無いように気をつけてくださいね。」

その時を誰もが待っていたかのように、椅子を引く音とざわめきが一瞬にして教室中に広がった。

一時間近くにも及んだ最初のホームルームは、多くの人に退屈を与えていたらしい。

「理子、一緒に教科書買いに行こ。」

中学から付き合いのある、クラスで唯一の知り合い井川朋子が、退屈すぎる時間を終えて一息ついている私の席まで来て言った。

「うん、朋ちゃん。」

机の横についているフックに掛けていた鞆を取り、私は立ち上がった。

「行こうぜ、室岡。」

騒音の中から聞こえた言葉に反射的に耳が傾き、ゆっくりと振り返った。

私は先程、耳の奥で響いた声の主を見た。

はじめて、室岡くんを見た。

第2話 「言葉を交わした下足場。」

まだ朝ご飯を食べている最中だというのに、傍に置いていた携帯の着信音が鳴った。

朋ちゃんからのメールだった。

『理子おはよう。古典の現代語訳やってある？もしやってあったら写させて。アタシ今日あたるのー。』

私はすぐにメールを返信した。

『一応やってあるけど、今日国語一限だよ。写す時間ある？』

朋ちゃんはいつも、朝のホームルームが始まる十分か五分前、ほとんどギリギリで学校に来る。ホームルームが終わるとすぐに一限なので、正直ノートを写す時間なんてないはず。

”コピーしてから行こうか？”くらい書けばよかった、と私は携帯の表示画面に、『メール送信完了』の表示が出てから思った。再び着信音が鳴った。

『大丈夫。今日一本早いバスに乗るから』

朋ちゃんはバスで通学している。

『八時十五分くらいには学校に着けると思うから、悪いんだけど理子、付き合ってくれない？』

私は再び返信する。

『わかった。じゃあ私もちよつと早く行くね。』

そう書き込んで私は携帯を閉じた。

時計に目をやると七時二十七分だった。

私は急いで残りのパンを口に詰め込んで、ココアで流し込んだ。ちよつと苦しかった。

「ごちそうさま。」

そう言い終えると、私は傍の携帯を掴んで二階の自分の部屋へと走った。

階段を上っている途中でまたもや携帯が鳴る。

朋ちゃんからの折り返しメールだった。

部屋に入って携帯を見る。

『サンキュー。じゃあ教室で。』

携帯を閉じ、通学用の鞆に押し込めて部屋を出た。

階段を勢い良く駆け下りて、私はリビングに向かった

「いつてきます。」

「あら、今日はいつもより早いね。」お母さんが言った。

「うん。朋ちゃんと待ち合わせてるから。」

そう　とお母さんは玄関で靴を履いている私の後ろで言った。

「じゃ、いつてきます。」

「いつてらっしゃい。」というお母さんの声を聞いて、私は

玄関の扉を閉めた。

少し急ぎ足で学校を目指した。

学校の校門に着くと七時五十分だった。

生徒が極端に登校する時間帯にはまだかなり時間があつたため、学校の周りは静かだった。

私は玄関を通り抜け、自分の下駄箱の前で立ち止まった。

靴を脱ごうとした時、誰かが玄関から入ってくる気配がした。

「あ。」

口には出さず、心の中だけで私は言った。

例の室岡くんだった。

「おはよう。」

私のものからは少し離れた位置にある下駄箱の前で、靴を脱ごうとしている彼に向かって言った。

「ああ、おはよう。」

ちらっと私の方に視線をやって、彼は挨拶を返してくれた。

「随分早いんだね。いつもこんなに早く来てるの？」

「ああ・・・サッカー部の朝練があるから。」

そっか　と私が言うと、彼は踵を潰して内履きを履いた。
「じゃあね。」

そう言うと、体育館のある方向へと歩いていった。

パタッパタッという靴の音を、静かな廊下に響かせていく彼の
後ろ姿を、私はしばらく目で追った。

まだ新しさの残る内履きをしっかりと履いて、体育館とは
逆の方向にある教室へと私は足を進めた。

教室に着くと、朋ちゃんが待ちくたびれたような顔で席に
座っていた。

「理子、遅いよ!!」

「ごめん、これでも急いだんだけど。」

「まあ朝突然言い出した私も悪いんだけどさ、でも誰もいない
教室にひとりでかなり寂しかったんだから。」

まだ八時前の教室に、私達ふたり以外の声はない。

「じゃあこれ古典のノートね。」

鞆の中から一冊のノートを取り出して、朋ちゃんに手渡した。

”サンキュー”と言うと、朋ちゃんはそそくさとノートを
写し始めた。

私はその隣の席にそつと腰を下ろし、特に理由もないけど携帯を
取り出し適当にいじって暇を持て余そうとした。

ふと隣から朋ちゃんが声をかけた。

「理子、なんか良いことでもあったの?」

一瞬ドキッとした。

「別にないけど、なんで?」

「ん、なんか嬉しそう。」

そう言うと、朋ちゃんはシャーペン握る自分の手を早めた。

今日はいつもよりちょっと早く学校に来ただけ。

いつもと同じように一日が始まって、いつもと同じように

一日が終わる。

何の変哲も無い日。ただそれだけのこと。
きつとそう。

高校に入学して一ヶ月。

室岡くんとはじめて言葉を交わした。

第3話 「何かを期待した朝。」

翌日、朝ご飯を食べ終えてふうつと一息ついてから、時計をちらりと見た。

時刻は午前七時三十分。

昨日は朋ちゃんとの突然の約束のために、早く家を出なければいけなかった。

でも今日はそんな必要はない。

約束もしていなければ、メールだって来ていない。

私はココアの入ったカップを両手で持ち、ゆっくりと口へ運んだ。そしてもう一度時計を見た。

秒針がコチコチと動いている

残りのココアをグツと飲み干して、テーブルにカップを置いた。

「ごちそうさま。」

傍に置いてある携帯を取り、リビングを出て二階へ行った。

部屋に入り時計を見ると、七時三十二分。

私は鞆を手に、持っていた携帯を押し込めながら部屋を出て階段を下りた。

「行ってきます。」

リビングに顔を出して私は言った。

「あら、今日もお友達と約束？」

「う・・・うん。」

そう言っ私は玄関に急いだ。

靴を履いて立ち上がって、「行ってきます。」と言うと、お母さんはいつも通り「いつてらっしゃい」と言った。

玄関の扉を閉めると、私は急ぎ足で学校へ向かった。

何が目的でこんなにも急いでいるのか、自分でもわからなかった。とにかく早く学校へ行きたい。

ただそれだけしか頭にはなくて、それだけで足は自然と前に出た。

学校に着くと、時刻は昨日と同じ七時五十分を指していた。途中走ったりもしたせい、少し息切れがする。

私はゆっくりと校門を抜け、玄関へと足を進めた。

昨日と同じで人気は無く、とても静かだった。

私は玄関を通り、自分の下駄箱の前で立ち止まった。

そして靴は脱がないまま周りを見渡した。

誰もいない。

本当に静かだ。

ふと体育館へと続く廊下にも目をやった。

そこにも人気はなかった。

「ふう。」

一息ついてみた。

私、何してるんだろう

そんな考えが頭に過ぎった。

「キィ・・・バン！バン！　ガチャン！」

内履きを取り出し、履き替えて靴を下駄箱に仕舞った。

教室へ行こう

確かにそう思ったはずなのに、いつの間にか私は逆の方向へ歩いていった。

校舎とを繋ぐ渡り廊下を通り、辿り着いたのは体育館だった。

その扉は頑丈そうな金属でできていて、だけど動かすのは

意外にも簡単だった。

私は体育館の扉を少しだけ開けた。

バスケットのゴール、壇上、そして片付けられずに放置された

いくつかのボール達が転がっている。

そこにも人の気配はなかった。

『そっか。』

心の中で私は呟いた。
体育館の扉を閉めて、私は早足で教室を目指した。
何を期待していたんだろう

第4話 「君の朝 私の朝。」

次の朝、七時二十五分に家を出た。

「今日もまた随分早いね。」というお母さんに、私は

「なんかこの時間の方が自分に合ってるみたい。」とだけ言った。

そんな私にお母さんは”そっか”とだけ言って、それ以上は聞こうともしなかった。

聞かれても、私自身もその理由をわたってないから困るけど・・・

学校には七時四十五分に着いた。

相変わらず静かで誰もいない。

誰かが来る気配もない。

私は玄関へと向かった。

玄関を通り抜け、とりあえず辺りを見回してみる。

昨日と同じ

私はそう思った。

自分の下駄箱へ足を進めようとした。

「あ、あはよ。」

突然後ろから声がした。

振り返ると、室岡くんがそこにいた。

口から心臓が飛び出るかと思った

とはまさにこのことかもしれない。

「おはよう。」

そう言っただけで私は下駄箱へと歩いた。

室岡くんが後ろからついて来る。

同じクラスだから当たり前なんだけど、どこか落ち着かない。

「いつもこんなに早く来てんの？」

靴を履き替えている途中で、室岡くんが言った。

「私は　昨日学校に辞書忘れちゃって、今日当たるところ予習してなかったから・・・」
嘘だった。

辞書を忘れてなんかいないし、予習も一応してある。

なんでこんな事言ってるだろう、私

ふうん　とだけ室岡くんが言う。

「朝練って毎日あるの？」私が聞いた。

「ううん、火曜と木曜だけ。」

そう言えば、朋ちゃんからメールがきた一昨日は火曜日だった。

意味もなく早く家を出た昨日は水曜。そして今日は木曜日

『そうだったんだ。』

私はまた心の中で言った。

内履きに履き替えた彼は、下駄箱の扉を閉め歩き出した。

「じゃあね、佐倉さん。」

そう言うと、体育館へと続く廊下を進んでいった。

相変わらず踵をつぶし、パタッパタッという靴音を鳴らしている。

そんな彼の後姿を、心臓を足早に脈打たせながら見送った。

その時の室岡くんの声も、しばらく耳の奥で響いていた。

第5話 「新しい友達。」

「理子ちゃんっていつも朝早いよね。」

利用者の少ない朝の図書室で、適当な本をパラパラとめくってる私に隣に座る由美ちゃんが言った。

同じクラスで図書委員の松本由美ちゃんは、週に何度か朝の図書室の管理当番の仕事がある。

当番といっても、やることは本を借りたり返したりする際の手続きくらいで、しかも朝は利用する人が本当に少ないため、由美ちゃん曰くとにかくヒマらしい。

「由美ちゃんだって朝早いじゃん。」

「でも前は私が一番だったのに、最近は理子ちゃんの方が早いよ。」あれから私は、毎日八時前には学校に来ている。

火曜と木曜はサッカー部の朝練がある。

それを目的としているわけでも、火曜と木曜だけ早く来たいと思っているわけでもない。

ただなんとなく早く来てしまう。それだけのことだった。

室岡ちゃんと話せるとか、そんな考えはどこにもなくて、火曜と木曜でも彼に会わない日はあるし、そんな時はさっさと教室に行ってしまう。

それでも何とも思わなかった。

由美ちゃんと仲良くなったのは、ある朝、誰もいない教室でひとり英語の訳をしていた時だった。

突然教室の扉が開くガラツという音がした。

入り口に視線をやると、ひとりの女の子が入ってきた。

「おはよう。」彼女は言った。

「おはよう。」と私は返した。

同じクラスの松本さんだった。

「佐倉さん、朝イチに学校に来て勉強なんて偉いね。」

松本さんが言った。

「そんなことないよ。暇だったからやってるだけで、頭なんて全然入ってないし。」

そう言っていると、松本さんは「そういうのわかるかも。」と言った。

「松本さんこそ随分早いね。」私は聞いた。

「私は図書委員で当番があるから。」

松本さんは自分の席の机の横にあるフックに、手にしていた鞆を掛けた。

「じゃあ私、図書室に行くから。」

そう言って、彼女は教室を出て行った。

それ以来、何度か朝の教室で言葉を交わしていくうちに、私達は
”由美ちゃん” 理子ちゃん”と呼び合うようになった。

私が由美ちゃんについて、早朝の退屈な時間を図書室で過ごすようになったのは、由美ちゃんが何気なく言った一言からだった。

「よかったら理子ちゃんも図書室に来ない？」

その時私は、家から持ってきた雑誌を読んでいた。

「でも、邪魔じゃない？」

「全然。むしろいてくれた方が私は嬉しい。」

「なんで？」

「来てみればわかるよ。」

そう言っていると、由美ちゃんはフツツと笑った。

「じゃあ行こうかな。」

そう私が言っていると、由美ちゃんは”ヤッター”と言って両手を真上に挙げた。

そしてふたりで教室を出た。

職員室で図書室の鍵と数冊のファイルを由美ちゃんが受け取って、私達は図書室へと向かった。

由美ちゃんが器用に図書室の鍵を開ける。

扉が開いて中に入ると、いかにも図書室らしい空気と、本の匂いが漂ってきた。

由美ちゃんは、カウンターと呼ばれるところに私を招き入れてくれた。

ふたりきりしかない図書室で、私と由美ちゃんはお互いのことをひたすら話した。

中学はどんな感じだったとか、携帯の機種は何だとか、そんな他愛もないことばかりだった。

由美ちゃんは眼鏡をかけていて、一見ガリ勉タイプ系の子だったけど、

話してみると楽しくて、すごく良い子だと思った。

由美ちゃんが”来てみればわかる”と言った意味はすぐにわかった。私達が図書室にいた三・四十分の間に、中に入ってきたのは五・六人。

そのうち返却・貸し出しを利用したのはたったの二人だった。

由美ちゃんが言うには、ひどい時は誰も入ってこない日もあるらしい。

由美ちゃんの当番は毎日じゃない。

彼女の当番のない日、私はしばらくの間教室でひとりで過ごす。

そんな時間は悪くはなかった。

私は朝早くの学校が好きだと思った。

第6話 「明日から夏休み。」

「全員、通知表は受け取りましたか？」

多少のざわつきが絶えない教室で、平原先生がいつもより少し声を荒げながら言う。

先生が教壇に立っている時、いつもなら教室内はもっと静かなのに、今日はそんな空気はどこにもなかった。

みんなが浮かれるのも無理はないと思う。

外では太陽が高々と昇り、燦燦と照っている。

気温はきつと三十度を上回っているだろう。

おかげで蝉もあちこちで鳴いている。

明日から夏休み

初めての通知表は、まだ多くの箇所上空欄があつて、新鮮だった。ひと通り目を通していると、チャイムが鳴った。

「それではみなさん、良い夏休みを過ごしましょう。」

そう平原先生が言うと、教室中は一斉に騒ぎだした。

今日は午前中で学校が終わりになるので、午後から遊びに行く話し合いをみんなしているだろう、などと思いながら、

私は荷物を整理した。

「理子ー。」

朋ちゃんが由美ちゃんとさやかといっしょにやってきた。

朋ちゃんと同じ吹奏楽部の仁科さやかは、朋ちゃんが”同じ部活なの”と話してくれたことがきっかけで仲良くなった。

「これからみんなで遊びに行こうって話してたんだけど、理子も行くでしょ？」

朋ちゃんが言った。

「ごめん、私これから部活なんだ。」私は言った。

「え、理子ちゃん部活なの？残念ー。」と由美ちゃんが言う。

「せっかくみんなで盛り上がりうと思ったのに。」

と言ったさやかは、”サボっちゃえ”とまで言ってきた。

「コンクールとかあって、課題がいっぱいあるんだよね。」
私が言う。

正直、みんなと遊びに行きたかった。

だけど、八月の中旬が締め切りのコンクールに出品する予定の絵の出来が、全くと言っていい程進んでなくて、まだ下書きさえもしていない状況だった。

他にも、夏休みの課題として描かなければいけない絵もある。夏休み中に集中してやろうとも思ったけど、この炎天下の中、頻繁に学校に通うのは嫌だった。

それに、なんといつてもせっかくの夏休み。

それを絵ばかり描いて過ごすのはごめんだと思い、終業式の午後はそっちを優先しよう和前々から決めていた。

「ホントごめん。その変わり夏休みはいっぱい遊べるから。」

「海とかが行きたいよねー。」さやかが言った。

「私水着持っていないよ。」と朋ちゃん。

それから私達は、どこへ行きたいとか、何がしたいかなどを話し、その中のいくつかが実行されるかわからないが、最終的には”メールするから”という一言で収められた。

「じゃあね、理子。部活頑張ってね。」と朋ちゃんが言った。

「うん、ばいばい。」

手を振って私はみんなと別れた。

家から持ってきたお弁当で昼食を済ませ、私はそのまま美術室で時間を費やした。

やっこの思いで何とか下書きだけでも完成させると、私は

「ふーっ」と大きく息を吐いた。

時計を見ると四時三十分だった。

初めは何かいた美術部員も、ひとりふたりと帰っていき、気づけば自分だけになっていた。

私は道具を片付け、描きかけの絵を邪魔にならないように端に避けて美術室を出た。

鞆を教室に置いたままにしていた。

教室までの廊下や階段はどこもひっそりとしていて、生徒の気配がほとんど感じられなかった。

まるで朝の学校みたい・・・

教室に入ると、ポケットに入れていた携帯のバイブがブルブルと鳴った。

さやかからメールが来た。

『理子、部活終わった？ 私達これからご飯食べに行くんだけど、理子も行かない？』

私はすぐに返信した。

『ありがとう、もちろん行くよ。』

さやかからみんなとの待ち合わせ場所を聞くと、私は自分の家に電話をかけた。

家の電話にはお母さんが出た。

『これから友達とご飯食べに行きたいんだけどいいかな？』

『いいけど、あんまり遅くならないように帰ってくるのよ。』

電話の向こうでお母さんが言った。

私は「わかってる」と言って電話を切った。

机の横の鞆を取り、携帯を押し込めていた時だった。

「ガラッ。」

教室の扉が開いた。

私は視線をやった。

室岡くんだった。

「あれ？」と室岡くんは言った。

「佐倉、まだいたの？」

私への呼び方は、いつの間にか”佐倉”になっていた。

「うん、部活だったから。」

室岡くんは”そっか”と言うと、ゆつくりと歩き出した。

「室岡くんこそどうしたの？」私が聞く。

「ああ、さっきまで部活だったんだけど、なんか財布忘れたみたいで・・・」

そう言うのと、彼は自分の机の中を手で探った。

「お。あつたあつた。やっぱここだったか。」

ほっとしたような様子を見せて、室岡くんは財布を、持っていた鞆の中にしまった。

「見つかつてよかったね。」

私は言った。

「つつーか気づいてよかった。この後メシ食いに行くのに、それまで気づかなかつたらかなりヤバイことになってただろうし。」

そうだね　と私は言った。

「それじゃあ私はこれで。」

そう言つて、私は鞆を手に教室を出ようとした。

「あ、待つて。」

彼の一言に、ピタリと足が止まった。

第7話 「黄昏と君と初メール。」

「佐倉のアドレス教えてくれない？」

室岡くんが言った。

「え？」

正直驚いた。

彼からそんなことを言われるとは、思ってもいなかった。

「夏休みだから、クラスの男子女子で遊んだりしたいって友達と言っててさ、でも誰も連絡先知らないから。」

それって、別に私じゃなくてもいいんだよね

なんて考えが一瞬頭を過ぎった。

「そうだね、そんな風にも遊びたいね。」私は言った。

「だろ？」と言うと、彼は自分の机に座った。

私は携帯を取り出した。

開いて、自分のメールアドレスと番号が登録してあるデータを表示画面に映すと、携帯をそのまま彼に差し出した。

「じゃあこれ、私の番号とアドレス。」

「おつ、サンキュー。」

そう言って、室岡くんが手を伸ばす。

その時、少しだけ彼の指に触れた。

ドキッとした。

室岡くんは自分の携帯を開き、指を懸命に動かしてボタンを押していた。

そんな彼の姿を、私はすぐ傍でただじっと見ていた。

西日が教室を照らし、室岡くんが少しオレンジ色に染まっている。

「これで合ってる？」

しばらくして室岡くんが言った。

自分の携帯を翳して私に見せる。

並べられたいくつものアルファベットに、私は目を通した。

「うん、たぶん合ってると思う。」

「じゃ、これ返す。」と言って、彼は私の携帯を渡した。

彼から返された携帯は少し温かくて、なんだか心地良かった。

「今からちよつと送ってみるから。」と室岡くんは言った。

しばらくして、私の携帯がブルブルと音を立てた。

メールボックスを開くと、見たことないアドレスと、本文には同じく見たことない番号が書かれていた。

「届いた？」

「うん。」

「俺の、登録しといてね。」

室岡くんが言った。

メモリーの「む」の欄に、”室岡尚志”という名前が登録される。

きつと、彼の携帯の電話帳の「さ」の欄には、”佐倉理子”という名前

が刻まれている。

なんだかくすぐつたいものを感じた。

「じゃ、俺帰るわ。」

室岡くんが立ち上がった。

「うん、じゃあね。」

彼はスタスタと出入り口に向かって歩いていく。

「気をつけて帰れよ、佐倉。」

そう言つて室岡くんは教室を出て行った。

夜、お風呂からあがつて、部屋で一息つきながらふと携帯を開いてみると、”メールあり”の表示があった。

こんな時間に誰だろう　　と思いながら、メールボックスを見る。
室岡くんからのメールだった。

『夏休み、部活あったりする？』

私はすぐに返信した。

『部としての活動はないけど、課題の絵描きに学校には行くよ。』
思っていたより、メールはすぐに返ってきた。

『俺もほとんど部活だよ。もしかしたら学校で会つかもね。』

私は一言、『そうかもね。』と送って携帯を閉じた。

それから返信は返ってこなかった。

室岡くんと初めてのメールのやりとりは、案外短時間で終了した。
まだ生乾きの髪を、私は急いでドライヤーで乾かした。

もう日付も変わっている時刻。

そのままベッドに入り、電気を消した。

目を閉じると、自分の心臓の脈動の音が聞こえた。

それは驚くほど素早く、静かな部屋中に響き渡るくらいドキドキと
鳴っていた。

第8話 「夏の約束。」

夏休みに入ってすぐ、室岡くんから突然メールがきた。
アドレスを交換した日の夜以来だった。

『今度の週末、予定あいてる？』

突然のメールにも驚いたけど、メールの本文にも十分驚いた。
予定を聞くななんて

私は何かを期待した。その何かはわからなかった。

『私をあいてるけど、どうして？』

私は返信した。

『林たちと海でバーベキューしようって言うてるんだけど、佐倉と、
佐倉の仲良い女子も、都合よかったら一緒に行かない？』

そういうことか

私はふと思った。

『聞いてみるよ。男子は誰がいるの？』私が送る。

『俺と林と塚田と陣内。』と室岡くんが送ってきた。

そこに書かれていた苗字は皆、同じクラスの人達だった。

高校に入学して四ヶ月。さすがに顔と名前だつて一致する。

『じゃあ、また連絡するから。』

そう私が送ると、室岡くんは”OK”の一言だけ返信してきた。

朋ちゃんと由美ちゃんとさやかに、室岡くんからのメールの内容を
話すと、何気にみんなノリ気だった。

朋ちゃんは、”そういうの憧れてたの！！”と言い、さやかは”

こんなチャンスは滅多にない”と言った。

由美ちゃんは穏やかに、”おもしろそう”と言った。

私はすぐに室岡くんに、報告のメールを送った。

『わかった。じゃああいつらに言っとく。』という返事がきた。

『うん。でも、私達まで参加して本当にいいの？』

『全然いいって。クラスの男女の仲を深めようって林が言ってたし。

』

それは私達じゃなくてもいいのかな

仲の良い女子ができるならだれでも良くて、たまたま私と室岡くんがアドレスを交換し合った事がきっかけになっただけで、もしも交換したのが私じゃなくても、きっと彼は同じことを言ったのだらう。

『また詳しい予定が決まったら教えて。』

と私は返信した。

”了解”という室岡くんからの返事に、なんだかモヤモヤした。

なんだろう、この気持ち

私はベッドに仰向けに寝転がって、天井を見つめた。

次の日、私は午前中を学校の美術室で過ごした。

夏休みになってまで早起きするのもどうかと思ったけど、日が高くなるにつれて暑さも増すだらうと予測し、朝の涼しいうちに事を終わらそうと思った。

だけど予測はハズレた。

朝からジリジリと焼けるように暑く、美術室の窓を全開にしてもちつとも風は入ってこなかった。

そんな異常な気候と戦いながら、私は筆を持つ手を動かした。

正午近くになると、さすがに耐えられなくなり、集中力もプツリと切れた。

暑い

誰もいない美術室で、私はひとり呟く。

これ以上こんな所にはいられない。

そう思い、私は使った筆やら絵の具やらを片付け始めた。
手を洗おうと捻った蛇口から出る水が気持ちよかった。
描きかけの絵を端に寄せると、鞆を手に私は美術室を出た。
廊下の方がいくらかは涼しかった。

下足場で、靴を履き替えようとしていたとき、どこから声がした。

「佐倉。」

振り向くと、室岡くんが歩いてきた。

「なんか見たことある後ろ姿だと思ったら、やっぱり佐倉だったな。」
彼が笑いながら私を横切る。

「今日は部活だったの？」

靴を履き替えている最中の室岡くんが言った。

「うん。でも部活っていうより、課題になってる絵を描きにきた
だけなんだけどね。」私は言った。

「絵、上手いの？」

室岡くんは聞いた。

「上手いかどうかはわかんないけど、絵を描くのは好き。」

ふうん　　と言うと、彼は下駄箱の扉をカタン、と閉めた。

「そういえば昨日の話だけど」

思い出したかのように彼が言った。

「日曜の朝九時に駅に集合ってことになったんだけど、いい？」

「わかった、伝えておくよ。道具とか材料はどうするの？」

「道具は男子が分担して持っていくし、材料は、なんか海岸の
近くにスーパーがあるらしくて、そこで買うつてさ。」

そっか　　と私は言った。

「なんか男子に任せてばかりで悪いね。」

そう言うと、室岡くんはハハッと笑った。

「そんな事ないって。それに女子には料理のときに任せるし。」

室岡くんが横目で見る。

「えっ……私、ヘタだよ。」

そう言うと、室岡くんは大きく笑った。

「それ、いろんな意味で楽しみかも。」

私はフツと笑いを溢した。

室岡くんを見ていたら、私まで可笑しくなって、つられて笑ってしまった。

彼の笑い声が、耳を突き抜け、胸の奥にまで響いた。

第9話 「それは一瞬の出来事。」

「この焼きそばスゲー美味くない？」

そう言っただのは塚田くんだった。

これでもかというくらい高く昇った太陽は、焼けるほどに浜辺を照らし、絶好のバーベキュー日和となった。

「理子って料理上手だったんだね。」さやかが言う。

「袋に書いてあった作り方の通りにやっただけだよ。」

たまたま作った焼きそばが、妙にみんなの好評を得た。

「いや、今まで食った中で一番美味いつて!!」

と大袈裟な言い方をしたのは陣内くんだった。

「仁科には絶対できないよな。」

そう林くんが言うと、本日何度目かのさやかとの言い合いがまた始まった。

さやかと林くんは、小学校からの知り合いで、昔から小競り合いが絶えないらしい。

ふたりの間に恋愛感情と呼ばれるようなものは無く、言わば

”腐れ縁”というやつだとさやかは言った。

みんな、また始まったよ などと言いながらふたりのやりとりを茶化していた。

そんな彼らを、ただの腐れ縁だけじゃないような気が私はしていたけど、案外みんな同じ事を思っているかもしれない。

私はチラリと室岡くんを見た。

缶ジュースを片手に笑ってる。

なんだか嬉しかった。

「あれ、ウーロン茶もう無いや。」

朋ちゃんが言った。

「あ、じゃあ私買ってくるよ。」

私が立ち上がったと言った。

「ひとりで大丈夫？」由美ちゃんが言う。

「スーパーすぐそこだから平気だよ。ちょっと待っててね。」
そう言って私は歩き出した。

砂浜から道路へ出る階段を上り、車が行き来する車道に出ると、私は向かいの歩道に渡るために左右を見渡した。

「佐倉ー。」

後ろから声がした。

振り向くと、室岡くんが階段を上ってきていた。

「荷物、重たいだろうから俺も一緒に行くよ。」

彼は少し息を切らしながら言った。

「でも、ウーロン茶のペットボトルだけだから、私ひとりでも平気だよ。」

「いや、実は他にも買ってきて欲しいものあったみたいでさ、それだけ伝えに来るのも何だし、ここまで来たからにはもう荷物持ちくらいするし。」

室岡くんが笑った。

その大通りは、すぐ斜め前にスーパーの建物が見えるのに、それよりもずっと車道沿いに行かないと信号も横断歩道も無い、ちよつとやつかいな所があった。

車も頻繁に、左右どちらからもやってくる。

私と室岡くんは、車の切れ目をひたすら待った。

「おっ。」

ふと室岡くんが言った。

「今だ。行くよ！」

そう言っていると、彼は私の右手首を掴んだ。
グイッと引つ張られ、彼と一緒に走り出した。

反対側の歩道に辿り着くと、いつの間にか彼の手は離れていた。

ハア　、ハア　・・・

ふたりに息を整える。

「ふう　、渡れてよかったな。」と室岡くんが言う。

「うん。」

室岡くんが歩き出した。

その後ろを、私が黙って付いていく。

室岡くんの後ろ姿は、白いタンクトップ越しに浮き上がる
骨のラインと、二の腕の筋肉がとても綺麗だった。

どうしてこんなにドキドキするんだろう

スーパーで買い出しを終え、大きい袋を室岡くんが、小さい袋を
私を持った。

最初、室岡くんが全部持つと言ったけど、それじゃあ本当にただの
荷物持ちで嫌だ、と私が言ったら、彼が小さい袋を寄越した。
そして、来たときと同じように室岡くんが前を、私が後ろを、
間には微妙な間隔を空けて歩いた。

途中で、お互いの好きな音楽や、よく行く店の話などをした。
時々後ろを振り返って笑う室岡くんに、口元が綻んだ。

「あ、そうだ。」とふと彼が言う。

「上手いじゃん。」

振り返り私の方を見て彼は言った。

「なにが？」

「料理。焼きそば、美味かったよ。」

そう言って彼は微笑んだ。

「だから作り方見てやっただけなんだってば。」
私が言う。

「それでも美味かったよ。」

そう言つて、彼はまた前を向いた。

みんなが言つた事と同じもののなのに、室岡くんが言つと違うものに聞こえるような気がした。

来た時と違つて、帰りはすんなりと道路を渡れた。

少し残念に思つた。

「理子ー。」

朋ちゃんが手を振りながら離れたところで叫ぶ。

買つてきたものを手渡し、私も室岡くんも大勢の輪の中に入る。

私は左手で、右の手首をそつと触つてみた。

室岡くんが私の右手首を掴んだのは、ほんの一瞬だった。

それなのに、その時の彼の手の感触が、力強さが、鮮明に思い出された。

ふと見ると、友達と楽しそうに笑い合う彼が映つた。

胸の奥がドクン　と鳴つた。

第10話 「君の彼女と私の恋心。」

八月も終わりに近づき、夏休みも残り数えるほどとなった。

私は、夏休みの課題となっていた美術部の作品を仕上げるため、朝から学校に来ていた。

「なんか、あんなにたくさんあった割にはあつという間に終わっちゃったね、夏休み。」

その日は二年生の高梨杏子先輩も来ていて、時折言葉を交わしながらもお互い筆を進めていた。

「そうですね。私なんてまだまだ遊び足りないですよ。」
私は言った。

「私もー。でも、来年はそうは言ってられないんだろうなあ。」
高梨先輩が溜め息を混じらせながら言った。

来年、高梨先輩は三年生。

三年生になれば、夏休みもただの休みではなくなる。

「いいなあ理子ちゃんは。来年の夏休みも遊べて。」

高梨先輩が言った。

「なんか私、来年今先輩が言ったようなこと言いそうですよ。」
そう私が言つと、ふたりの笑い声が美術室中に響いた。

ねえ と高梨先輩がふと言った。

「理子ちゃんは、付き合ってる人とかいるの？」

「いないですよ。」

私は即座に答えた。

「じゃあ好きな人は？」

そう先輩が聞くと、私は少し戸惑った。

「それもいないんですよね。」

すぐに出ると思ってた答えを、私は間を置いて言った。

「ええー。同じクラスに気になる人とかいないの？」

同じクラス

笑ってる室岡くんの顔が一瞬浮かんだ。

それがなぜなのか、私にはわからなかった。

「本当にいいですって。」

笑い混じりに私が言う。

高梨先輩はそっか　と言った。

「でもまあ、まだ入学して間もないし、これからだよな。」

先輩は言った。

課題の絵がようやく完成した頃、時刻はすでに正午をまわっていた。

私はふう　と息を大きく吐いた。

「理子ちゃん、完成？」

高梨先輩が聞いた。

「はい、やつと。」

私は椅子の背もたれに体重を預け、クーっと背伸びをした。

「私もこのあと友達と約束があるから、この辺にしとこうかな。」

先輩はそう言うのと、立ち上がって道具を片付け始めた。

それに続いて私も立ち上がった。

自分の使った筆を手取る。

「それじゃあ理子ちゃん、私はこれで。」

画材道具をケースにしまっている私に、高梨先輩は言った。

「はい。お疲れさまでした。」

おつかれさま　と言って、先輩は美術室を出て行った。

高梨先輩が出て行った数分後に、私も美術室を後にした。

階段を下り、下足場へと向かう。

今日、サッカー部はどうしてるのかな

なんて考えが浮かんだ。

下足場に着くと、自分の下駄箱の扉を開けた。
中から靴を取り出し、床にボタン・と落とす。
私はふと外に視線をやった。

玄関から数メートル先の校門。

そこに、ひとりの男子生徒が立っていた。

それが室岡くんであることに、私はすぐに気がついた。

「あ。」

私は心の中で呟いた。

室岡くんはひとりでいるわけではなかった。

よく見ると誰かと話している最中のようで、時折頷いたり
何かに笑っている様子が見られた。

彼と一緒にいる相手は、校門が陰になっていて見えなかった。
同じサッカー部の人と話しているんだろう

そう私は思った。

靴を履き替え、内履きを下駄箱に仕舞い扉を閉めた。

室岡くんに”バイバイ”くらい言うってから帰ろうかな

そう思い、玄関に向かおうとした瞬間だった。

進もうとした足が自然と止まった。

視線の先は校門

さっきまで室岡くんしか見えなかったのに、そこに別の学校の
制服を着た女子生徒が加わっていた。

彼女は、室岡くんとても親しげに話している。

室岡くんの肩に触ったり、ワイシャツを掴んだり、そんなことを
繰り返していた。

そして立ち話も飽きたのか、ふたりはどこかへ歩いて行った。

手を握りながら、方を寄せ合いながら

「そっか。」

仲の良いカップルが見えなくなっても、しばらくその場を見つめていた私が溢した。

私は歩き出した。

玄関を通り抜け、校門を潜る。

何も考えず、何も思わず、ただひたすら家までの道を歩いた。目頭だけが熱かった。

家に着くと、鍵を開けて中に入った。

家の中はシン　としている。

今の時間、お父さんは会社に、お母さんはパートに、中学生の弟の裕也ひろやは三日前から、所属している野球部の合宿に行っていて明日まで帰らないため、家には誰もいなかった。なんだか妙に寂しくなった。

靴を脱いで階段を上がり、颯爽と自分の部屋に入る。

窓を閉め切って出かけたため、部屋には熱気が充満していた。

冷房をつけることなどどうでもよかった。

持っていた鞆を椅子の上に無造作に置き、私は勢い良くベッドに飛び込んだ。

仰向けに寝転がって、上だけをじっと見つめた。

見えていたのは天井じゃなかった。

室岡くんと、室岡くんと話す女の子。

手を繋いで歩くふたりの姿が、目に、頭に焼きついて離れない。

そして、女の子と一緒にいる室岡くん。

嬉しそうに笑ってた。

愛おしそうに手を繋いでいた。

そんな彼を見るのは初めてで、そんな顔をするのを私は知らなかった。

ただただ彼の姿だけが見えた。

室岡くんのことばかり頭に浮かんで、浮かんで、浮かんで・・・

涙が出た。

室岡くんのことを考えれば考えるほど涙は溢れた。

室岡くん、彼女いたんだ

いいなあ、彼女がいて

いいなあ、彼女なんて

いいなあ、室岡くんの彼女になれて

ずっと気づかずにいた。気づかないフリをしてきた。
抑えていた感情が、想いが溢れて溢れて止まらない。

好き。

彼が好き。

室岡くんが好き。

第11話 「君と机を並べて。」

夏休みが終わり、新学期が始まるとすぐに席替えがあった。

黒板に書かれた座席表と、自分が引いたクジの番号を照らし合わせると、私の新しい席は窓側の、前から三番目。

視力が飛びきり良いわけではないが、悪すぎるほどでもない私にとっては、無難な場所だった。

「理子、どうだった？」

朋ちゃんが席を移動して聞いてきた。

私は窓側の席になったことを伝えた。

「いいなあ。私なんて教卓の近くだよ。」

朋ちゃんが引いたクジは、真ん中の列の左側、前から二番目を示していた。

授業中、教壇に立つ先生の視野に一番入りやすい場所。

「これじゃあ昼寝もできないじゃん。」と朋ちゃんは愚痴を溢した。

そんな朋ちゃんに私は笑った。

「それじゃあ席を移動してください。」

平原先生が言うと、教室中が椅子を引く音や、机を引きずる音、生徒達の声でざわめいた。

私は新しい席に机と椅子を置いて座った。

ふう　と一息ついた。

周りはまだ賑やかだった。

私の斜め前にはさやかが座った。

「やったね理子、近くじゃん。」

さやかが言った。

「ね。すごいラッキー。」

私達は”自習のとき一緒にやろう”などとたわいない話を話していた。

ふと気がつくと、私の隣に誰かが机を置いた。

私は隣に視線をやった。

一瞬、呼吸が止まったように私は固まった。

室岡くんがいた。

「あれ、隣佐倉？」

彼はそう言つと腰を下ろした。

「あ、うん。」

そう言つて私は目を反らした。

室岡くんを見れなかった。

「あいつら三人して何気にくつついててさ、俺だけ離れてつまんねえ
とか思つてたんだよ。」

廊下の方を見ると、林くん、塚田くん、陣内くんが、通路を挟んで
それぞれの席で話していた。

「何気に仁科もいるじゃん。」

さやかを前に室岡くんは言った。

「何気で悪かったね。」

室岡くんが笑った。

「よろしくな、佐倉。」

「うん・・・」

いろんな気持ち混ざってる。

ドキドキして、そして胸の奥が痛い。

室岡くんが好きだと思つた。でも彼には彼女がいる。

大丈夫、まだ戻れる

ただの友達に。クラスメイトに。

私は彼を気になり始めただけで、本気で好きになつたわけじゃない。

そう自分に言い聞かせた。

次の授業の時間になり、教科担当の先生が入ってきた。
みんなが一斉に席に着く。

隣の彼も席に着いた。

「寝てたら起こしてくれよな。」

彼が小声で言った。

見ると、ただ微笑んでいた。

またドキドキした。

静かな授業中、この心臓の音が教室中に響くんじやないかってくらい、

その音は大きく、そして早かった。

隣に室岡くんがいるというだけで、こんなにも心がざわめく。

彼のことが上手く見れない。

前はこんなじゃなかったのに

とにかく想いだけが溢れた。

もう、戻れないかもしれない。

室岡くんのことが好き

私はもう、それしか考えられない。

第12話 「その背中にしかなえない。」

室岡くんと机を並べたのは、ほんの二ヶ月程度だった。

次の私の席は、真ん中の列の後ろから二番目で、由美ちゃんと通路を挟んで隣どおしだった。

私と由美ちゃんは、退屈な授業のときは決まって手紙を交換し合った。

手紙の内容は、昨日見たテレビの話や、読んだ漫画や雑誌の感想などといったくだらないようなものだったけど、先生の目を盗んでやりとりするスリルが楽しかった。

室岡くんは教卓の真ん前。

その場所のクジを引いたとき、彼は「昼寝ができないじゃん。」と言っていた。

かつて朋ちゃんが言ったセリフと同じだったのが可笑しくて、私は笑った。

「佐倉、交換してくんない？」

と言った彼に、私は「ヤダ。」と即答した。

前を向くと、室岡くんが見える。

彼は、左手で頬杖をつきながらノートを取ることが多い。

伸びてきた後ろの髪がうつつうしいのか、よく襟足をいじっている。

私は彼の後ろ姿ばかり見ていた。

この席の方が、室岡くんの方がよく見えた。

隣の席だった頃は、右側から彼の呼吸を感じた。

でも横目でしか見れなくて、一度、室岡くんが”教科書を忘れたから見せてほしい”と言ってきたことがあった。

その時はお互いの机をくつつけて、私の教科書が境目に置かれた。

教科書なんてろくに見れなかった。

いつも以上に彼の息遣いがすぐ傍で聞こえて、何よりも彼とひとつのものを共有しているということにひどく緊張した。

室岡くんの後ろ姿がよく見えるこの席は、彼についての新たな発見がたくさんできた。

だけど、言葉を交わす機会が減ったような気がする。

前は、授業と授業の合間の休憩時間に何度か話しをしていた。

ふたりでだったり、時には斜め前のさやかを交えて。

この席になってからそんなことができなくなって、少し寂しい。

でも自分から話しかけに行くなんて絶対できなくて、近づくどころか隣でも後ろでも、私は彼の顔がまともに見れない。

前は見る事ができた。

何も知らなかった頃。

何も気づかずにいた頃。

室岡くんが好きだと思ったときから、上手に彼のことが見れなくなつた。

なんだか恥ずかしくて、切なくて、どうしても目を反らしてしまう。

後ろの席から前の方にいる室岡くんに、何度も何度も何度も、

心の中で好きだと云った。目で訴えた。

室岡くんは、何事もなく退屈そうに授業を聞いている。

こんな風でしか”好き”と言えない。

席が離れていることが、彼との間の微妙な距離が痛い。

室岡くんに彼女がいることが切ない。

絶対「好き」なんて言えないと思った。

第13話 「聖なる日のパーティー。」

初めて、クリスマスの家以外の場所で過ごした。

夏休みに海に行ったメンバーでクリスマスパーティーをする計画が立てられたのは、冬休み直前の終業式の日だった。

最初にパーティーをしよう、と言い出したのは室岡くんだったようだ。

男子だけでは活気がない、との塚田くんの意見に、それなら気軽に話せる女子がいいということで私達にお呼びがかかったらしい。

『24日、午後四時に林くんの家に集合だつて。』

というメールが由美ちゃんから届いたのは、終業式の翌日だった。

今日は12月24日

私達女子は四人揃って林くんの家に向かっていた。

「こんな大勢で押しかけて、林くんの家迷惑じゃないのかな？」

冬休み直前に、眼鏡からコンタクトに買えた由美ちゃんが道すがらに言った。

「大丈夫だよ。パーティーは明良んちのアトリエでやるって言ってたし。」

彫刻を趣味としていた林くんのお祖父さんが、生前アトリエと称して使用していた離れがあり、お祖父さんが亡くなられた今は、宴会場として利用されることが多いと、さやかが話してくれた。

「さすが、よく知ってるね。」

私は言った。

「褒められても嬉しくないんだけど。」とさやかが言うと、私達三人は一斉に笑った。

「ねえ、プレゼント何にした？」

朋ちゃんが言う。

クリスマスらしくプレゼント交換も計画されていて、ひとりひとつ

ずつ

プレゼントを用意して持っていくことになっている。

「女の子とおしならどんなものがいいかわかるけど、男子もいるからね。」さやかが言った。

自分が選んだプレゼントが誰のものになるかわからないので、男子も女子ももらって喜ぶものを選らばなければいけなかった。

「でもここで言っちゃうと楽しみが減るよ?」

そう私が言つと、「そうだね。」とみんなが口々に言った。

結局、プレゼントの中身は内緒になった。

林くんの家のアトリエに入ると、すでに男子達は飲んだり食べたりを始めていた。

室岡くんもそこにいた。

「なあ、こういうの考えたんだけどどうかな?」と陣内くんが

唐突に言ってきた。

陣内くんの案は、プレゼントが誰のものかわからない方がおもしろいんじゃないか、という話だった。

ただそのまま交換するだけでは、包み紙などで誰が持ってきたものかがすぐにわかってしまうので、黒いビニール袋に入れて中が見えないようにし、帰るときに好きなものをビニール袋ごと選んで持って帰るようにしないか、と陣内くんは言った。

「それおもしろそうじゃん。」

そう最初に言つたのは塚田くんだった。

「私も。やっぱプレゼントはドッキリがいいよね。」

と朋ちゃんが言う。

みんなその突然の案に賛成だった。

私も同じ気持ちだった。

誰かが室岡くんのプレゼントをもらって、それをすぐ近くで見るのは気が進まなかった。

私達は各自黒のビニール袋を持ち、ひとりずつ順番に別室に入ると、

そこで用意してきたプレゼントを袋に入れ、そのまま広間へと戻る。その作業は全員が入れ替え終えるまで繰り返され、最後に別室に入った

塚田くんが戻ってくると、私達は袋ごとプレゼントを大きなダンボール箱の中に入れた。

どれも黒いビニール袋。

どれが私ので、どれが室岡くんのかわからない。

そうして私達のクリスマスパーティーは始まった。

全員が分担して持ち寄ったジュースやお菓子、サンドイッチなどの軽食類は、みるみるうちに減っていった。

パーティーは本当に楽しかった。

気づくと夜の九時になりかけていた。

「もう遅いし、そろそろお開きにしようぜ。」

言い出したのは室岡くんだった。

何人かから”もうちょっと”などと言う声も出たが、あっさりと聞き流されてしまった。

「何が入ってんのかな？」

由美ちゃんが言った。

私達は、ダンボール箱に入れられた黒いビニール袋を物色していた。どれもみんな同じに見える。

私は手を伸ばし適当な袋を掴んだ。

重いとも軽いとも、小さいとも大きいとも言えないようなものだった。

室岡くんのだったらいいのに

「これって、ひょっとしたら自分のものが当たる可能性があるよな。」と林くんが言った。

そういえばそうだね

とみんなが口々に言い、そして一斉に笑った。

笑い声が飛び交う中で、私達は林くんの家のアトリエを後にした。

第14話 「夜道で影だけは寄り添って。」

林くんの家からの帰り道、外は驚くほど真っ暗だった。

帰る方向は、何気にみんな似たような感じだった。

先頭を朋ちゃんとさやかが、その後ろを私と由美ちゃんが並んで歩き、少し離れて三人の男子がついてきた。

そこに室岡くんもいるのだろう

私は後ろを振り返って見ることはなかったけど、時折隣を歩く由美ちゃんとの雑談の合間に聞こえた彼の声に、耳をかたむけた。

ある程度歩いて、最初にさやかと由美ちゃんと同じ道で別れ、そのあとしばらくして陣内くんと別れた。
残った四人で暗い夜道を歩く。

あ　　としばらく歩いたところで朋ちゃんが言った。

「私こつち。」

立ち止まった朋ちゃんが、十字路の一角を指差して言った。

「塚田もこつちじゃないっけ？」

室岡くんが言った。

「ああ、うん。井川さんちどの辺？」

「えっと、コンビニのこの」

由美ちゃんが塚田くんに説明する。

「そこなら俺通り道だから送るし。」

しばらくして塚田くんは言った。

「ホント？ありがとう。」と朋ちゃん。

「じゃあ私達ここで。またね、理子。」

「うん、気をつけてね。」

私と朋ちゃんはバイバイの手を振った。

「じゃあな、室岡。」と塚田くんが言う。

室岡くんがおう　　と言うと、ふたりは通りを歩いて行った。

残ったのは、私と室岡くんのふたりだけになった。

「佐倉の家はどのあたり？」

最初に口を開いたのは室岡くんの方だった。

「駅の裏。歩道橋を渡ってすぐくらい。」

そう言った私に、室岡くんは「そっか」とだけ言った。

「てゆうか、実は俺んちも駅の方なんだよね。」

室岡くんが言う。

「どの辺？」と私は聞いた。

「駅前の美容室がある通りを行った辺り。結構佐倉の家に近いのかも。」

今度は私が「そっか」と言った。

私の家と室岡くんの家は、意外と近いことを知った。

「んじゃ行くか。」

と室岡くんが言う。

私は「うん。」と言って、先に歩き出した彼について行った。

駅までの道は人氣が少なく、静かだった。

私と室岡くんは、時々言葉を交わしながら足を進めた。

この時も、私は室岡くんから少し離れた後ろを歩いた。

街頭に照らされて、夜道に微かに私と室岡くんの影が映る。

そのふたつの影が、まるで寄り添っているかのように見えて、それだけでたまらなく私はドキドキした。

あの影のように室岡くんと歩けたらいいのに

前を歩く彼に、私は心の中で「好き」と云った。
彼はひたすら私の前を歩く。
言葉に出来ないことが齒がゆかった。

駅通りに出ると、周りは少し明るくなった。

室岡くんの家は駅前の通りだと言っていたので、おそらく彼には
歩道橋を渡る必要はないだろう。

「それじゃあここで。」

私は言った。

本当はもつと一緒にいたいけど、そんな事は口に出せず、出しては
いけないとも思った。

彼には彼女がいるのだから

胸が締め付けられて、泣きそうになった。

ここで泣くわけにはいかない。

だって、目の前に彼がいるから。

「じゃあ、またね。」

そう私は言おうとした。

「やっぱ家まで送る。」

室岡くんが突然言い出した。

私は言葉が出なかった。

「せっかくここまで来たんだし、最後まで送るよ。」と彼は言った。

「そんな、悪いよ。それにもうそれほど距離もないし。」

歩道橋を渡って、最初の角を曲がるとすぐに、私の家はあった。

「それほどの距離じゃないなら、送ってもいいっしょ？」

笑いながらそう言って、彼は歩道橋に向かって歩き出した。

室岡くんの優しさが嬉しい。

でも、胸の奥がギュウってなるのは変わらなかった。

嬉しくて切ない

だってその優しさは、私だけのために出たものじゃないから。
相手が私でなくても、彼はきっと同じことを言っただろう。
それが切なくて、また泣きそうになった。

「ほら佐倉、行くよ。」

室岡くんが言う。

うん　　と言って、私はまた彼のうしろを歩いて行った。

第15話 「クリスマスの奇跡。」

歩道橋を渡り、家のすぐ近くの角を曲がる直前だった。

「室岡くん、もうここでもいいよ。ホントにもう、すぐそこだから。」
私は言った。

このまま何も言わなければ、おそらく彼は家の前まで来てくれた。
私達は付き合ってるわけじゃない

それを忘れないために、何かを期待しないために、そのための
境界線を自分から張ることは大事だと思った。

「ねえ。」

室岡くんがふと溢す。

「このプレゼント、中見てみない？」

プレゼントの入った紙袋を軽く持ち上げてみて、彼は言った。

「ここで？家に帰って見た方がいいんじゃない？」

私は言った。

「なんか気になんだよね。俺が何もらったかみんなに言うなよ。」

口止めするくらいならこんな所で開かなきゃいいのに

なんて思ったが、彼はすでに包装紙を開いていた。

中から四角い箱が出てきた。

彼が箱を開くと、中からシンプルなデザインの、ブラウン色をした

マグカップが出てきた。

私は目を見開いた。

「マグカップじゃん、ラッキー。丁度欲しかったんだよね。」

嬉しそうに彼が言う。

それ・・・と私が言う。

「それ、私が持ってきたやつ。」

マグカップなら活用性もあるし、男子でも女子でももらって違和感

がないと思った。

デザインも、派手すぎずできるだけシンプルなものを選んだ。それが今、室岡くんの手元にある。

何気なく選んだプレゼント。

誰がもらうかわからなかったプレゼント交換で、好きな人の手に渡るなんて

「え、これ佐倉の?」

室岡くんが聞く。

私はコクン、と頷いた。

「マジ?ありがとう、大事にする。」

そう言つて彼は笑った。

”大事にする”という彼の一言と微笑みで、また胸の奥がドキンと鳴った。

「佐倉も開けてみたら?俺も誰にも言わないからさ。」

彼がそんな風に言うから、私まであけたくなってしまった。

私が手に取った黒いビニール袋の中からは、オレンジ色のリボンで巻かれたオレンジ色の包み紙が出てきた。

リボンを解いて中に入っているものをゆっくりと取り出した。

私がもらったのは、手の平サイズの白い猫の貯金箱だった。

「可愛い。」と私は言った。

あ　と室岡くんが言う。

「それ、俺の。」

一瞬耳を疑った。

私が用意したプレゼントを室岡くんがもらつて、室岡くんのを私がもらうなんて、こんなことがあるのだろうか。

「何か、俺達つてすげえね。」

そう言つて彼は笑った。

「ありがとう、私も大切にする。」

そう言うと、室岡くんは「うん」とだけ言った。

「じゃあね、送ってくれてありがとう。」

「ああ、また学校でな。」

そして私達は別れた。

たった一言ずつ交わした会話が、一瞬でも恋人どおしになれたような気がした。

角を曲がって家の玄関のドアを開けて中に入るまで、私は一度も後ろを振り返らなかった。

彼がまだあの角にいるかもしれない

でも私達はそんな関係じゃないから、きつと彼はもういない

そのどちらも確かめるのが恐くて、後ろを振り返ることなんてできなかった。

室岡くんからもらった貯金箱を、机の上にそっと置いた。

その貯金箱を見れば見るほど室岡くんの事が思い浮かんで、口元がゆるやかに綻んだ。

私のプレゼントを室岡くんが、室岡くんのプレゼントを私が手にしたことは、奇跡的なことかもしれない。

どちらもその相手のために選んだわけじゃなかった。

だけど私は、できたら室岡くんの手に渡ってほしいと密かに思っていた。

そして、室岡くんのプレゼントがもらえたらいいのに、とも思っていた。

願いが叶ったわけじゃない。

偶然起こった出来事でもなければ、奇跡でもない。

これは運命だつて、私はひとり思った。
そこには何の根拠もないけれど。

クリスマスの夜を好きな人と過ごせた。
それは何よりものプレゼントで、そんな日くらいは運命を
信じてもいいのかもしれない。

第16話 「バレンタインデーのチョコ。」

「ねえ、理子ちゃんは誰にチョコあげる？」

図書室のカウンターで、隣に座る由美ちゃんが聞いた。

「お父さんと弟にあげるけど。」

「それだけ？」

私は”うん”と答えた。

「理子ちゃん、好きな人とかいないの？」

一瞬ビクツとした。

別に、隠す必要なんてきつとどこにも無いのだろう。

好きな人がいて、それが誰なのか、今ならはつきりと答えが出せる。

だけど、誰かに話すことはまだ上手にできなかった。

「いないよ。」と私は言った。

「由美ちゃんは誰かにあげるの？」

「あ、うん……」

由美ちゃんは少しか視線を反らした。

すると、誰かがカウンターに近づいてきた。

「平本先輩!!」

隣の由美ちゃんが突然立ち上がって言った。

「松本さん、ご苦勞様。」

そう言うのと、眼鏡をかけた男子生徒はチラッと私の方を見た。

「あつ、彼女友達なんです。勝手にカウンターに入れてすみません。」

いつも落ち着いている由美ちゃんが、その時だけは少し緊張している様子を見せた。

「ああ、いいよ。俺もよくそうしてるし。」

「そうなんですか。」と由美ちゃんが言った。
「だいたい朝の当番なんて、そうでもしないと退屈すぎて寝そうだよ。」

そう平本先輩という人が言うと、由美ちゃんは可愛らしく笑った。
彼は本を借りたかったみたいだった。

嬉しそうに貸し出しの際の手続きをする由美ちゃんを見て、
これは　と悟った。

「ありがとう松本さん。引き続き頑張つてね。」

そう言つて彼はカウンターから離れ、図書室を出て行った。

「由美ちゃんがチョコあげる人つて、もしかして今の人？」

私は聞いた。

「私、バレバレだった？」

「ていうか、嬉しそうだった。」

そう私が言つと、由美ちゃんは照れるように笑った。

彼は二年生の平本中あたる先輩といつて、由美ちゃんと同じ
図書委員の生徒だった。

委員の仕事をしているうちに仲良くなったと、由美ちゃんは言った。
「それで、いつ渡すの？」私が聞いた。

うん　と由美ちゃんが言う。

「先輩、今日放課後の当番だから、その時について思つてる。」

私は”そっか”と言った。

「告白はするの？」

そう聞くと、由美ちゃんは”えっ”と言つて、驚いた表情をした。

「たぶんダメだとは思っけどね。」

「それでも告白するの？」私が聞く。

「だって、言わないままって苦しいじゃん。」

そう言つて由美ちゃんは微笑んだ。

私はまた”そっか”と言った。

由美ちゃんが言うように、好きな気持ちを言えないのは辛い。

でも、私の恋は好きな人に彼女がいる。

だから、告白してもNOという返事が返ってくることはわかってる。結果がわかってるから、告白なんてできない。

”好き”なんて絶対言えない。

結果を恐れず告白しようとする由美ちゃんが羨ましく思えた。

室岡くんにもチヨコは用意していなかった。

”義理”としても、”本命”としてもあげられないから・・・

第17話 「ホワイトデーに君は何を贈る。」

3月14日のホワイトデー目前に、室岡くんからメールがきた。

『女って、ホワイトデーにどんなものもらったら嬉しい？』

どんな返事を返そうか迷う。

私はしばらく携帯を見つめた。

『突然どうしたの？』と、とりあえず送ってみる。

『バレンタインにチョコもらったからお返ししたいんだけど、何をあげたらいいかわかんないんだよね。』

『彼女から？』なんてことを私は聞いてみた。

『うん。あれ、俺言ったっけ？』

聞かなくても、誰からチョコをもらったかなんて大体想像がついた。
『学校の近くで一緒にいるとこ見たことあるから。』

やっぱり彼女からもらったんだ

わかってたけど何かが気に入らなくて、胸の奥がモヤモヤした。

『で、何もらったら嬉しいの？』

室岡くんが聞いた。

『何でもいいんじゃない？』と私が送る。

『なんだよー、もつと親身になってくれよ。』

そんな事言われても・・・

『やっぱり無難にクッキーとかがいいんじゃない？』

私は送信した。

『でもさあ、彼女はわざわざ手作りのチョコとかくれてんの、俺は店で買ったクッキーなんてなんか失礼じゃない？』

彼の、そんな風に相手を思いやるところに私も愛しくなった。

でも、彼が思っているのが彼の彼女だということに、胸が締め付けられた。

『じゃあ、どこかに遊びに行ってもいいんじゃない？』
私を送る。

『え、そういうのもいいの？』

『物より気持ちだと思う。』と私は送った。

好きな人の恋愛相談にのるなんて、馬鹿みたいだと思った。
だからと言って投げやりにもできない。

室岡くんに嫌われたくなかったから。

せめて、「女友達」という枠の中にはいたかった。

『佐倉ならどんなお返しがいい？』

室岡くんが聞いてきた。

私は……

『映画見に行ったり、ご飯食べたりとかしたいな。』

『そんなんでいいの？』と彼が言う。

『うん。一緒にいられる方が嬉しい。』

何かをもらえるのも嬉しいけど、好きな人と手を繋ぎながら、
たわいもない話をしてどこかに出かけることに憧れた。

そんな恋がしたかった。

そっか　と室岡くんが送ってきて、メールは終わった。

私はベッドに寝転んだ。

室岡くんの彼女は、どれくらい室岡くんのが好きなんだろう。

私とどっちが室岡くんのことをより好きなんだろう。

そんなこと比べられるわけないのに、計れやしないのに、

顔も名前も、何ひとつ知らない室岡くんの彼女に嫉妬した。

もし私がチヨコをあげていたら、彼はこんな風に悩んだのだろうか。

第18話 「高校二年生。」

春休みが終わり、今日から新学期が始まる。

いつもより少し遅めに家を出て、私は朋ちゃんと一緒に学校に向かっていた。

「やだなあー、クラス替えなんて。」

隣を歩く朋ちゃんが言った。

今日はクラス発表の日でもある。足取りもいつもより少し重め。

「塚田くんとまた同じクラスになりたいなあ。」

クリスマスパーティーの日の帰り道、朋ちゃんは塚田くんと途中から一緒に帰って以来、彼のこと気がなってるらしい。

「さやかや由美ちゃんとも同じだといいよね。」

私が言うと、朋ちゃんは「そうだよな」と言った。

室岡くんと同じクラスだといいなあ

半ば祈るように私は学校へと足を進めた。

学校に着くと、玄関は人だかりができていた。

貼り出されているクラス割りに、生徒達が注目している。

私と朋ちゃんは、人ごみを掻き分け前へ進んだ。

「理子、また一緒だよ。やったね!!」

私と朋ちゃんはまた同じクラスだった。

井川朋子……佐倉理子……

私は目線を下へと下げていった。

”室岡尚志”という名は、私の新しいクラスの中には無かった。

「あ、塚田くん隣のクラスだ。」

すぐ傍で朋ちゃんが小声で言った。

「だったら体育とか、選択授業で一緒になるじゃん。」
私達のクラスと塚田くんのクラスは、合同で受ける授業がいくつかあった。

「あ、室岡くんもいるよ。」

そう朋ちゃんが言ったので、私はもう一度クラス割りの紙に目をやった。

室岡くんは塚田くんと同じクラスで、私達の隣だった。
少しだけホッとした。

同じクラスになれなかったのは残念だけど、隣どおしになれたことが
せめてもの救いかもしれない。

「理子、行こう。」と朋ちゃんが言う。

「うん。」

私達は新しい下足場へ向かった。

私は高校二年生になった

「よお、佐倉。」

始業式から何日か後。

その日は木曜日だった

私は相変わらず朝早く登校している。

室岡くんに会った。

「あ、おはよ。」

そう言うと、彼は「おお」と返した。

「佐倉、隣のクラスなんだってな。」

室岡くんが歩きながら言った。

彼は私の後ろで立ち止まった。

下駄箱の扉を開け、内履きをバタバタと床に落とす音が後ろから
聞こえてくる。

「教科書とか忘れたら貸してくれよな。」

そう言つて、彼は私の肩をポンツと叩いた。

びっくりして振り返ると、微笑んでる彼と目が合った。
ドクンツと心臓が鳴る。

「いたずら描きとかしないですよ。」私が言った。

室岡くんがアハハツと笑う。

「人物にヒゲとか描いて返そつかなあ。」

そんな彼の言葉に、私も思わず笑をこぼす。

「じゃあね。」

そう言つて室岡くんは体育館の方へと歩いて行つた。

私のクラスと室岡くんのクラスの下足場は向かい合っていて、
彼の下駄箱は私の真後ろだった。

それはあまりにも些細なこと。

だけどそんな何気ないことに、私はまたひとり運命を感じた。

第19話 「君と同じものを見る。」

「選択授業、何にするか決めた？」

ある朝、下足場で室岡くんが言ってきた。

「たぶん美術にしようと思う。」

私は言った。

選択授業は、音楽・美術・書道の中から一教科だけ選び専攻するというシステムが二年生から組まれていて、個人で自由に決めることになっている。

先生の話しによれば、卒業後の自分の進路に合わせて選択するのが望ましいらしいが、それをちっとも考えていない私は、自分の得意分野でいいと思っていた。

「佐倉美術部だもんな・・・」

下駄箱に寄り掛かりながら話す室岡くんは、私は「うん」と言った。

「美術楽しい？」

室岡くんが聞く。

「私は楽しいよ。」

そう言っと、彼は「そっか」と言った。

「俺も美術にしようかな。」

ふと室岡くんは言った。

「佐倉がいれば教えてもらえそうだし。」

微笑んだ彼が私を見る。

もし室岡くんが美術を選んでくれれば、授業と一緒に受けられる

そんな期待が私の中にできて、絶対美術を選んで欲しいと思った。

「そんな決め方でいいの？」私が聞いた。

「だって俺音楽は苦手だし、書道か美術だったら美術の方が楽しそうなイメージあるじゃん。」

奔放な決め方がいかにも彼らしくて、気持ちよかった。

「塚田にも言っておかなきゃな。」

「塚田くんも美術にするの？」

「たぶん。あいつも俺と似たような考え方だし。」

”そうなんだ”と私は言った。

その瞬間、朋ちゃんに報告することを決めた。

「理子、それホント？」

その日の昼休み、昼食をとっていた最中に今朝のことを朋ちゃんに話した。

「室岡くんはそう言っただけど・・・」

”塚田君は美術を選択するらしい”という話しに、朋ちゃんは興奮を隠し切れずにいた。

「でもそれで美術じゃなかったら最悪じゃない？」

朋ちゃんが言った。

確かに、塚田くんが美術を選ぶかはまだ決まったことじゃなかった。

「本人に聞いてみたら？」

私がそう言つと、朋ちゃんは初め”ええ〜”と言ったが、満更でもないみたいでそそくさと携帯を取り出した。

どうやら塚田くんにメールを送るらしい。

塚田くんへのメールを打つ朋ちゃんは、可愛らしく見えた。

”私もあんな風に誰かの目に映っているんだろっか”なんて思ったりした。

塚田くんからのメールの返事はすぐにきた。

携帯を見る朋ちゃんの表情が、見る見る明るくなる。

「理子、塚田くんも美術にするって！！」

満面の笑みを浮かべた朋ちゃんが言った。

「でも朋ちゃん、音楽にするって言ってなかった？」

「塚田くんが美術にするなら私も美術にする！」

そう朋ちゃんは言った。

数日後、初めての選択授業の日

私と朋ちゃん、教材を持って美術室へと向かった。

教室に入ると、窓際で塚田くんを交えた数人の男子と話している室岡くんを見つけた。

ちよつとホツとした。

ふと彼と目が合った。

微笑んだ彼にドキツとして、私も微笑を返してみた。少し恥ずかしかった。

やっぱり室岡くんが好き

改めてそう思った瞬間だった。

授業が始まる

席はクラス別になっていて、室岡くんとは随分遠かった。時々視線を彼の方へやってみる。

彼の後ろ姿が見えて、相変わらず左手で頬杖をついている。

ねえ、好きだよ、室岡くん

彼の背中に私は黙って告白した。

届かない声。伝わらない想い。

一年生の時と変わらない。

彼の後ろ姿にしか、声にならない声で好きと言えない

私達の距離は何ひとつ変わっていないけれど、この美術室内に彼がいることだけで嬉しかった。

同じ場所で、同じものを私達は見ている。

それだけで幸せだと思えた。

選択授業は週にたった二回ほどしか無い。

一週間に二回、私は彼と同じ空間にいられる。

美術の時間が、待ち遠しくて仕方なかった。

第20話 「友達の恋、私の恋。」

「あのさー、理子。」

「うん？」

もうすぐ夏休み。

夕方になっても汗が吹き出る暑さの中、私は朋ちゃんと一緒に帰り道を歩いていた。

「私、告ろうと思うんだ。」

隣を歩く朋ちゃんが言った。

「誰に？」

「塚田くんに決まってるじゃん!!」

朋ちゃんの一大決心だった。

「いつ言うの？」

私が聞いた。

「夏休み前には言うつもり。」

”そっか”と私は言った。

「へこんでたら慰めてね。」

朋ちゃんが笑って言う。

「告白するのって恐くない？フラれたら悲しいじゃん。」
私は言った。

うん と朋ちゃんが言う。

「そりゃあ恐いけどさ、言わなきゃ伝わんないし、何も変わらないじゃん。」

私はチラッと隣を見た。

朋ちゃんの目はとても真っ直ぐで、キラキラしていた。
彼女の言葉に、胸が締め付けられた。

私は恐い。

だって、”好き”って言っても、相手には彼女がいるからフラれるに決まってる。

それに、今の微妙な距離が心地よくて、それを崩してしまうのもまた恐かった。

「理子はいないの、好きな人？」朋ちゃんが聞く。

「いないよ。」

そっか　と朋ちゃんは言った。「できたら教えてね。」

そう言う朋ちゃんに、わたしは”うん”と静かに言った。

室岡くんが好き　と口に出してしまったら、押し込めている悲しさや切なさまで溢れ出して、止まらないような気がして恐かった。

室岡くんには彼女がいるのが嫌

私のほうがずっとずっと室岡くんのことを好きなのに

彼のことが好きだと思った瞬間からあった、私の中の濁ったモノ。そんな気持ちが自分の中にあることに、私はずっと目を反らしてきた。

向き合えずにいた。

でないと、好きでいることがもつと辛くなりそうだったから。そんな風に、多くのことから逃げている自分が、私は心底嫌いだっ

た。
夏休みに入ってまだ間もない頃、朋ちゃんから携帯に電話がかかってきた。

「理子、聞いて聞いて。」

朋ちゃんの叫ぶように話す声が、受話器越しに響いた。
「どうしたの？」

私が聞く。

「私、塚田くんと付き合うことになったの！！」

どうやら朋ちゃんは、告白してOKをもらったらしい。

「そっか、よかったね、おめでとう。」

朋ちゃんが電話の向こうで「ありがとう」と言った。

朋ちゃんの話によると、塚田くんも朋ちゃんのことを好きだったみたいで、

いわゆる両思いというやつ。

いいなあ

朋ちゃんが羨ましかった。

好きな人に好きって言ってもらえて。

両思いになれて。

好きな人に、好きになってもらえて

私は初めて室岡くんに自分からメールを送ってみた。

「塚田くんと朋ちゃんがくつついたんだって！！知ってる？」
すぐに返事は返ってきた。

「知ってる。塚田にさんざんのろけ聞かされた。」

「私も似たような感じ。」と私は送った。

室岡くんから返事は返ってこなかった。

初めて私から送ったメールは、案外短時間で終わった。

室岡くんとメールをするようになったのは一年前から。

勇気が出なくて、あと一歩がどうしても踏み出せなくて、
いつも彼からのメールを待ってばかりいた。

「言わなきゃ伝わらないじゃん」

そう言った朋ちゃんの言葉が、ずっと頭の片隅にあった。

それが私の背中をちよっとだけ押した。

自分からメールを送ったことにはすごく緊張した。

だけど、それをやり終えた今、とても心地よいものが自分の体の中にあることがわかる。

勇気を出してよかった
そんな気持ちになれた。

「好き」と言う勇気はまだちょっと出ないけど、私にとっては大きな一歩でもあった。

ほんの少し、自分を好きだと思った。

第21話 「私のすきなひと。」

今年の夏休みも、私は美術室にいた。

昨年と同じように美術部からいくつか課題が出され、さらに今年は選択授業の美術からも宿題が出されている。

おかげで私は、暑い中頻繁に学校に通わなければいけなかった。

今美術室にいるのは四人。

塚田くん、朋ちゃん、私、そして室岡くん。

美術の宿題を、せっかくだから四人でやろう、という話が数日前に持ち上がり、今に至る。

話を聞いた時、室岡くんと一緒にいられることにただただ喜んだ。けれど実際こうして作業を始めてみると、期待はずれだと思った。朋ちゃんと塚田くんが、一応手を動かしてはいるものの、延々とふたりだけの世界を創っている。

付き合ってまだ間もないから仕方ないのかもしれないけど、傍にいる私はちつとも集中ができなかった。

時計を見ると正午近くだった。

「私、そろそろ帰るね。」

予定の半分ほどしか進んでいなかった。

でもこれ以上筆を進める気にはなれなかった。

「理子、帰っちゃうの？」朋ちゃんが言う。

「うん、お昼ご飯家で食べるって言ってきたし。」

「そっか。またメールするね。」

うん　　と言って私はその場を離れた。

美術室をあとにして、廊下で”ふう”と息をひとつ吐いた。

私は階段を下りようとした。

「佐倉。」

突然後ろから声をかけられ、思わずビクツとした。
振り返ると、室岡くんがいた。

「ビクツしたあゝ。」と私が言う。

「悪い。俺も部活行こうと思って。」

彼は言った。

「宿題はいいの？」

「あんな所にこれ以上いらねーって。」

そう彼が言つと、私は”そうだよ”と笑いながら言った。
私は階段を下りる。

すぐ後ろを室岡くんがついてくる。

私達は下足場へと向かった。

「でもいいよなあ、ああいうの。」

ふと彼が言った。

「室岡くんだって彼女いるじゃん。」

「そうだけど、やっぱり学校違うせいかな、すれ違ってばっかです。」

そう　と私は言った。

下足場で、私達は背中合わせに靴を履き替える。

ボタン　と、後ろで室岡くんが下駄箱の扉を閉める音が

聞こえた。

「あのさ。」と室岡くん。

「何？」と私は振り返り言った。

「佐倉はいんの？」

「何が？」

「付き合ってる奴。」

私は”いないよ”と即答した。

ふうん　と室岡くんが言う。

「じゃあ好きな奴は？」

好きな人に好きな人を聞かれるって、何とも微妙な感じだった。

「いるよ。」

隠したくはなかった。気持ちを知って欲しいわけでもなかった。

”いない”とは言いたくない。

ただそれだけだった。

「誰？」と室岡くんが聞いてきた。

「内緒。」

私が言う。

そっか　と彼は言った。

「じゃあ俺、そろそろ行くわ。」

そう言っただけで室岡くんは行ってしまった。

彼の遠ざかっていく後ろ姿を、私は玄関で立ち尽くしたまま見てた。

好きな人は、室岡くんだよ

そう言っただけでしまえばどんなに楽だろうか。

だけど、それを口に出してしまったら、私達は私達でいられるのだろうか。

今の関係が、微妙な距離がとても心地良い。

それらを崩してしまうことも、壊してしまうこともしたくなかった。

私はまた、室岡くんの後ろ姿に心の中で”好き”と言った。

第22話 「背中越しの君の体温。」

秋も終わりに近づいて、日暮れが早くなった夕方には少し肌寒さを感じた。

「佐倉先輩、お先に失礼します。」

活動を終えた後輩が美術室を後にする。

「お疲れさま。」

そう言つて私は後輩を見送った。

今週中に、今描いている絵を完成させたかった。

私はひたすら、絵の具の付いた筆を持つ手を動かした。

それからどのくらいの時間が経つただろうか。

時刻もさすがに頃合になり、窓の外は真っ暗だった。

絵も大分完成に近づいた。

今日はこれくらいにしよう と思い、私は立ち上がった。

筆を洗い、ケースに片付ける。

描きかけの絵を端に寄せ、鞆を手に教室の出入り口へと向かう。
美術室には私以外誰もいなかった。

カチッ

電気を消して、私は美術室を出た。

階段を下り、下足場へと足を進める。

下足場はやけに静かだった。

靴を履き替え、玄関を通り抜けると、思っていたより風が冷たかった。

校門を潜り、家へと急ぐ。

チリン、チリン

自転車のベルの音が聞こえた。

私は立ち止まって後ろを振り返った。

自転車が私の横に止まる。

「よお。」

「室岡くん・・・」

室岡くんが自転車に跨ったまま声をかけてきた。

「今帰り？遅くない？」

彼が言う。

「部活だったから。」

そう言うのと、彼は”そっか”と言った。

「お前、もしかして歩いて帰んの？」

初めて室岡くん”お前”呼ばわりされた。

「そうだけど。」

「ひとりで？」

「うん。」

そしてお互い黙った。

あのだと最初に口を開いたのは室岡くんだった。

「後ろ、乗らない？」

「え？」

突然の出来事で、私はただただ驚くばかりだった。

「こんな暗いのにはひとりで歩いてたら危ないって。」

自転車に乗ったままの彼が言う。

「でも、家そんなに遠くないし平気だよ。」

帰り道は街燈もそれなりにあり、駅通りに出れば人気も多くなる。それほど危険な帰り道ではなかった。

「いいから。ほら乗って。」

そう言った室岡くん、片腕を掴まれた。

またドキドキした。

私は室岡くんの乗る自転車の後部に、後ろ向きで座った。

「なんで後ろ向きで座んの？」

後ろから彼が言う。

「この方が気持ちいい。」

前を向いたら今以上にドキドキして、思わず”好き”って
言ってしまうんじゃないかって思った。

いつもいつも、後ろ姿にばかり”好き”と言っていたから。

「いいけど、落ちるなよ。」

「落とさないように漕いでよ。」

私がそう言っていると、彼はハハッと笑った。

そして自転車がゆっくりと動き出す。

横切る風が冷たい。

触れ合う背中と背中。

風の冷たさが、彼の体温をより温かく伝えた。

「ねえー。」

と叫ぶように言ってみる。

「なにー？」

背中越しに、室岡くんが同じように叫び返した。

「重くない？」

「とりあえず漕げるから平気。」

私は”何それー”と言って、後頭部で室岡くんの背中を
コツコツと叩いてやった。

そして私達は笑った。

前を向いていなくてよかった。

背中から伝わる温かさが愛しくて思わず彼を抱きしめて
しまいたくなる。

道路に影が映る。

自転車と、それに乗るふたりの姿。その影も背中と背中が
ぴったりとくっついていて、少し恥ずかしかった。

それはまるで、仲の良い恋人どおしのように。

影だけは彼と恋人どおしになれた。

駅前の歩道橋近くで自転車が止まった。

「もうここでもいいよ。」

本当はもっと一緒にいたいけど

名残惜しみながら私は自転車から降りた。

「気をつけて帰れよ。」

「うん。ありがとね。」

私は勢いよく歩道橋の階段を駆け上がった。

この時も、私は一度も振り返ることなく歩道橋を渡り、家を目指した。

家に帰ったあとも、背中越しに感じた室岡くんの体温が鮮明に思い浮かんで、恥ずかしくなつて顔がにやけた。窓を開けて空を見てみると、星がたくさん散っていた。室岡くんにとって、私はきつとこの星のように、たくさんの中他とも何も変わらないひとつに過ぎないのだろう。私にとっては太陽のような人。

無くてはならないもので、大事な大事なもの。

だけど月のようにもあつた。

ぼんやりと温かく、そして優しい。だけど、見ているとどこか泣きそうになる。

涙がこぼれた。

第23話 「切ない恋に涙が出る。」

元旦に、朋ちゃん・由美ちゃん・さやかの四人で初詣に行った。

日にちが日にちなだけになんかなり混雑していた。

人を掻き分けてなんとか境内へと辿り着いた。

お賽銭を投げ入れて手を叩く。

パンツ、パンツ

願いごとはひとつしかない。

神様をお願いするくらいならいいと思った。

どうか、室岡くんと恋人どおしになれますように

冬休みが終わって、今日から新学期。

冬の朝はとにかく寒い。

私は相も変わらず早々と学校へ行く。

校門をすり抜け、玄関を通り下足場に着くと、寒さと静けさだけが広がっていた。

「よお、おけおめ。」

靴を履き替えている最中に室岡くんがやって来て、私の真横で言った。

「おめでとう。」と私も言う。

彼は私の後ろで靴を履き替える。

「餅食った？」

後ろから彼が言った。

「食べたよー。」

「俺なんて食いすぎて腹壊した。」

彼がそう言っていると、私はアハハと笑った。

室岡くんは、”笑うなよ”と言つて、グーにした手で

私の頭をコツン、と叩いた。

静かな下足場に、私と室岡くんの笑い声だけが響いた。

「そんじゃあな。」と言つて、彼は下足場を後にする。

「理子。」

名前を呼ばれ、肩をポンツと叩かれた。

振り向くと、朋ちゃんがそこにいた。

「朋ちゃん、おはよう。随分早いね。」

「うん、宿題がまだ終わってないから、朝早く来てやろうと思って。」

私は”そっか”と言った。

朋ちゃんとふたりで教室へ向かった。

教室は当然のように誰の姿もなく、シン、としていた。

「寒っ。」

と朋ちゃんが言うので、私はすぐにストーブを点けた。それでもすぐに暖かくなったりはしないので、私達はそれぞれの席に適当に鞆を置いてストーブを囲んだ。

朋ちゃんも私も何も話さず、ただただストーブに手を翳した。

「あのさ、理子。」

しばらくして最初に口を開いたのは、朋ちゃんだった。

「理子って、室岡くんのことが好きなの？」

「え？」

「さつき下でふたりが話してる時、理子すごく室岡くんのこと恋しそうに見てたから・・・」

と朋ちゃんは言った。

自分の気持ちを知られたことは嫌ではなかった。

室岡くんのことを恋しそうに見ていた

そんな目を自分がしていたかと思うと、少し恥ずかしかった。

「うん・・・。」と私は言った。

そう　と朋ちゃんが言う。

「ごめんね、いないとか言つて。」

「ううん、言いたくなかったんならいいよ。」

朋ちゃんのさり気ない優しさが嬉しかった。

「告白はしないの？」

朋ちゃんが言った。

私は少し黙った。

「私、恐いんだ。」

「何が？」

「告白したら、今の関係が崩れそうで、あんな風に話さなくなっちゃったりしたら、そっちの方が私は辛い。」

「うん、その気持ちはわかる。」と朋ちゃんは言った。

それに　と私が言う。

「室岡くん、他の学校に彼女いるから・・・。」

そう言つと、朋ちゃんは”そうなんだ”と静かに言った。

告白なんてできない。

だけど本当は、できないんじゃないかってただしなだけだって、自分でもわかってた。

悲しい想いをしたくなくて、傷つきたくなくて、いろんなものから逃げてきた。

それを受け入れられずに目を反らしてばかりいた。

それじゃ何ひとつ変わりはないのに、自分から何もしようとせず、何もかも悲しい恋のせいだからと言ってきた。

だけど、勇気も出なかった。

押し込めていた濁ったモノがあふれてくる。

一筋の涙がこぼれ、私は泣いた。

隣で朋ちゃんがそっと肩を抱いてくれた。

その優しさが愛おしくて、また涙が出た。

恋をすることは、切ない気持ちになることと常に同時進行だということを、私は初めて知った。

第24話 「高校三年生。」

気がついたら、私は高校三年生になっていた。

「離れちゃったね。」と朋ちゃんが言う。

今年も朋ちゃんとクラス発表を見に来た。

朋ちゃんとは大分クラスが離れてしまった。

隣どおしでもないため、選択授業で一緒になることもない。

「やっぱり三年間一緒ってのは無理だね。」

「そうだね。仕方ないよ。」

私は言った。

そして私達は、離れた下足場でそれぞれ靴を履き替えた。

「理子、良かったね。」

階段を上ってる途中で朋ちゃんが言った。

「何が？」と私が言う。

「室岡くんと一緒じゃん。見なかったの？」

「忘れてた・・・」

室岡くんとまた同じクラスになれるとは思っていなかったから、自分がどのクラスかしら見ていなかった。

「ちゃんとあったよ。理子のより下のほうに室岡くんの名前。」

そうなんだ　と私が言う。

室岡くんと同じクラス

私はまた、あの背中に声にならない声で”好き”と言うのだろうか。

「いろいろ辛いかもしないけどさ、良いこともあるって。」

そう朋ちゃんは言った。

朋ちゃんの言うとおりだ。

悲しくて切なかったりするけど、嬉しいと思える時も確かにある。

この恋はきつと、嫌なことばかりじゃない
そう思った。

「まあ、何かあったらいつでも話聞くから。」

そう言って朋ちゃんは私の肩をポンツと叩いた。

「うん、ありがとう。」

私が言うと、朋ちゃんは”じゃあね”と言って、私のよりもっと奥に行った所にある新しい教室へと歩いていった。

私は新しいクラスの扉を開けた。

知ってる人もいれば、初めて関わる人もいる。

少し緊張した。

「理子ちゃん!!」

突然名前を呼ばれた。

「由美ちゃん。」

すっかりコンタクトが馴染んだ由美ちゃんがいた。

「理子ちゃん、同じクラスだよ。」

「えっ、本当？」

どうやら私は本当に自分の名前しか見ていなかったらしい。

由美ちゃんに会って少しホツとした。

「私知り合いいなくて困ってたんだ。理子ちゃんがいてくれて良かった。」

そう由美ちゃんは言った。

三月の卒業式に、由美ちゃんは一年の頃から想いを寄せていた、平本先輩に告白した。

先輩に彼女はいなかったけど、先輩は卒業、由美ちゃんは

まだ一年高校生活が残っているから、ということで、先輩の答えはNOだったと由美ちゃんは話してくれた。

結果的に振られてしまった由美ちゃんは、涙を堪えきれず泣いた。さやかと朋ちゃんと三人でそれを宥めた。

私は、そんな由美ちゃんがいずれの自分に見えて仕方なかった。けれども、由美ちゃんは”諦めない”と言った。

平本先輩と同じ専門学校に進学して、もう一度頑張るらしい。
そんな由美ちゃんが私は羨ましい。

振られても強くいられることが、好きな人に好きって言える勇気があることが。

私はやっぱり、自分が嫌いかもしれない。

由美ちゃんと話していると、出入り口から室岡くんが入ってくるのが見えた。

「あ。」と私は心の中で言った。

室岡くんと、一瞬目が合った。

けれど、私も彼もすぐに反らした。

私は由美ちゃんと話し続けた。

ふと、制服のブレザーのポケットに入れておいた携帯が、ブルブルと震えた。

携帯を開くと、”メール受信”の文字が出ていた。

誰だろう

私はメールボックスを見た。

送信者の欄に書かれていた名前は”室岡尚志”。

室岡くんからのメールだった。

『また同じクラスじゃん。よろしくな。』

すぐ目で見える距離に彼はいる。

そして口でも言えるようなことを、言わなくても別に良いようなことがメールで送られてきて、なんだかふたりだけの秘密ができたみたいな気がして嬉しかった。

『こちらこそヨロシクね。』

私は返信した。

「嬉しいメールだったの？」と由美ちゃんに聞かれた。

なるべく平常心を保とうと思っているのに、どうしても伝わって

しまうのかもしれない。

「うん、まあ。」と私は言った。

口元が緩む。

彼の言葉に一喜一憂している自分。

私は、どうしようもなく室岡くんに惚れているみたいだ。

第25話 「受話器越しの声に。」

ある日の夜、部屋で突然携帯が鳴った。

電話の着信音だった。

携帯を開いて表示画面を見ると、なんと室岡くんからだった。電話がきたのは初めてだった。

私は緊張しながらも携帯を耳に当てる。

「もしもし？」

私と言う。

「あ、佐倉？俺、室岡。」

「うん。」

すぐそこに彼の声が聞こえて、とにかく心臓が高鳴る。

「ごめんな、こんな遅くに電話とかして。」

「余裕で起きてたから平気。」

彼は「そっか」と言った。

「あのさ、明日学校終わる時間確か変更になったじゃん。何時に終わるか教えてくんない？なんか、それ書いてあったプリント失くしちゃったみたいでさ。」

「うん、ちよつと待って。」

彼は「悪いね」と言った。

私はプリントを探し出して彼に伝えた。

「ありがと。」

室岡くんが言った。

「うん。」と私と言う。

それで初めての電話は終わると思ったた。

あのさ　と室岡くんが言った。

「俺、彼女と別れたんだ。」

一瞬、時間が止まったような気がした。
「そう・・・」

室岡くんが彼女と別れた

私にとっては喜んでいいことなのかもしれないけど、”嬉しい”
という気持ちはその時はなくて、何か微妙だった。

「なんで別れたの・とか聞いてもいい？」

私は言った。

ちよつと無神経すぎたかな、と言い終えた後に思った。

「なんか最近すれ違つてばっかだったんだよね。お互いの都合が
全然合わなくて、ふたりで会うこともほとんどなくて。」

私は彼が話すのを黙って聞いていた。

「あいつのことだんだんわかんなくなつてきて、こんなの
付き合つてゐるって言えないんじゃないかって思つてさ。だから
別れることにしたんだ。」

そうなんだ　と私は言った。

今、彼はどんな気持ちでいるのだろうか
そんな事を思つた。

「それに・・・」

ふと彼が言う。

「俺、好きなやつがいるんだ。」

私は耳を疑つた。

「そっか。」と私は言った。

胸の奥にポツカリと穴が開いたような気持ちになった。

「頑張つてね。私、応援するよ。」

そんな事が言いたいんじゃない。

だけど本当のことはどうしても言えなくて、ついつい思つても

いないことを口にしてしまつ。

「うん、ありがと。」

と室岡くんは言った。

そしてしばらくお互い黙った。

「それじゃあ、また明日学校で。」

先に沈黙を破った彼が言った。

「うん、また明日。」

私はそういい終えると、耳から携帯を離し電話を切った。

携帯は閉じているのに、もう耳元に声はしないのに、彼が言った言葉が耳の中で響いている。

俺、好きなやつがいるんだ

初めて室岡くんと電話して、大した用じゃなかったけど単純に嬉しかった。

そのまま空さえも飛べそうな気がした。

だけどその一言で、私の背に生えたはずの翼が一瞬にして消えた。

涙があふれる。

彼が私のことを好きならいいのに

願いはそれだけなのに、ただそれだけの願いがどうして

叶わないんだろう。

好きなことが切ない。

もうどうしようもないくらい室岡くんのが好き。

そして苦しい。

こんなにも苦しくて胸が痛いのに、彼じゃなきゃダメなんだ。

室岡くんじゃなきゃダメなんだ。

そしてまた、私の目から涙が頬を伝う。

彼のこととて泣くのは、もうこれで何度目だろう

第26話 「私たちの行き着く場所。」

「疲れたねー。」

教室に戻るまでの廊下で、隣を歩いていた由美ちゃんが言った。

「ホント。しかもかなり暑かったしね。」

夏休み前の進路説明会は、ただ暑いだけだった。

どこかから講師の先生がやってきて、長々と演説を聞かされた。

それだけでもしんどいのに、それに追いつきをかけるかのような暑さで、終わった頃には大半の生徒がうんざりとした表情だった。

「理子ちゃんは進路どうするの？」

由美ちゃんが聞いた。

「ん」と私が言う。

「一応デザイン系の専門学校を考えてるけど、具体的に何がしたいかなんて何も浮かばないなあ……。」

現実的に物事を考えなきゃいけない立場に自分がいることに、まだ実感が持てずにいた。

「そうだよ。いきなり将来とか決められないよね。」

由美ちゃんが言った。

進路に関する話は、一年生のときから何度か聞かされた。

「だけどいつも”まだ先があるから”と先延ばしにしてきた。

それを繰り返して、今自分は三年生になっている。

もう先延ばしはできない

高校を卒業したら、自分は何処へ行くんだろう。

みんなバラバラの道へ進んで、こんな風に会って話すことも
少なくなってしまうのだろうか。

朋ちゃんや由美ちゃんやさやか、そしてもちろん室岡くんとも。

いつか来るそんな日が不安で、けれどそれは、全て受け入れなければいけないことだっただってわかった。
でも、何かが悲しかった。

胸の奥がモヤモヤして、いろんな事を投げ出したくなった。
こっぴどい気持ちを、億劫っていうのだろうか。

教室へ戻ると、私は自分の席から鞆を手に取り、由美ちゃんの席に行った。

「由美ちゃん、一緒に帰ろう。」

「ごめん、私今日放課後の図書室の当番なの。」
申し訳なさそうに由美ちゃんが言った。

私は「そっか」と言った。

「ホントごめんね、理子ちゃん。」

由美ちゃんが顔の前で手を合わせて謝る。

「いいよいいよ。委員会の仕事頑張っただね。」

「うん、それじゃバイバイ。」

バイバイ　と私が言うと、由美ちゃんは行ってしまった。

まだ胸の奥がモヤモヤする。

今日は、なんだかひとりで帰りたくない

私は携帯を取り出しメールを打った。

『一緒に帰らない?』

最初に朋ちゃんに送った。でも返事はNOだった。

次にさやかに送った。朋ちゃんと返事は同じだった。

一緒に帰れるなら誰でもいい

そんな考え、相手には失礼だろうけど、その時の私は
ただただそう思っていた。

今はテスト前でもあるため、部活も休み。

まだ空が明るく、暑さも引かない中、ひとり渋々学校を後にした。

胸のモヤモヤは晴れることなく、私は重たい足取りで帰り道を

歩いていた。

どこか寂しくて、このまま真っ直ぐ家になんて帰りたくなかった。だけど他に行くとこるなんてどこにもなくて、余計寂しくなった。

チリン、チリン

聞き覚えのある音が後ろから聞こえてきて、私は振り向いた。自転車に乗った室岡くんが近づいてくる。

「お前、そんなボーっとして歩いてっとなんか転ぶぞ。」

私の横で、自転車に乗ったまま彼が言った。

「ボーっとなんてしてないよ。」

相変わらず室岡くんの顔をまともに見れなかった私は、視線を下にずらしたまま言った。

「でもなんか暗いオーラが漂ってたよ。何かあった？」

室岡くんは優しい。でもその優しさが、今は無性に痛い。

「何も無いよ。ちょっと進路のこととか話されて、ちょっとうっとうしく思っただけ。」

私は言った。

「ああ、それわかる。なんか気持ちが下向きになるよな。」

たわいもない話を彼として、そんな日がずっとずっと続けばいいのに、と思う。

「佐倉、もしかして急いでる？」

ふと室岡くんが言った。

「ううん、別に急いでないけど。」

「じゃあちょっと付き合わん？」

そう言っと、彼は自分の乗っている自転車の後ろを、片手でポン、ポンと叩いた。

乗れ と言ってるんだろうか？

「どこ行くの？」

私は聞いた。

彼はフツと微笑んだ。

「良いトコ。ほら早く乗って。」

半ば促されながら、私は彼の自転車に便乗した。前と同じように、彼に対して後ろ向きで座った。

「そんじゃあ出発進行！」

そう言って室岡くんは自転車を漕ぎはじめた。

第27話 「君とふたりでどこまでも。」

室岡くんの背中に寄り掛かりながら、遠ざかっていく景色をただ見ていた。

私達は、駅から大分離れた河川敷を通っていた。

背中から伝わる室岡くんの体温、川の水音、そして横切る風が涼しくて、とても心地が良い。

室岡くんはひたすら自転車を漕ぐ。

私はその後ろにじっと座る。

ふたりの周りだけは、ゆっくりと時間が流れているような気がした。

「気持ちいいね。」

ふと私が言った。

後ろから、「うん。」と答える彼の声が聞こえた。

交わす話はたわいもない、どうでもいいような事。

だけどそんな事に彼も私も笑って、それがとにかく幸せだった。

このまま、室岡くんの漕ぐ自転車に乗ったまま、どこへでも行きたいと思った。

「あ。」

ふと彼が言って、キュツと自転車が止まった。

「なあ、坂なんだけど、その座り方じゃ危くない？」

彼が振り向いて言った。

見ると、なかなか急な下り坂の頂上に自分達はいた。

確かに後ろ向きだと危ないかも

「そうだね。」と言って、私は一旦自転車から降りもう一度乗った。

室岡くんと同じ向きで座った。

すぐ目の前に彼の背中がある。

「じゃあこれで。」

私は言った。

うん　と室岡くんが言う。

そして、彼の手が自転車のサドル部分を掴んでいた私の手に触れた。

私の手を掴んだまま、彼は自分の腰へと回させた。

「しっかり掴まってるよ。」

室岡くんが言った。

彼の腰に手を回し、頬が彼の背中に触れる。

どうかこの心臓の音が聞こえませんかように

破裂してしまいそうなくらい、私はドキドキしていた。

ゆつくりと自転車が動き出し、坂道を下る。

最初はブレーキをかけながら、でも途中からは坂の勢いにまかせて一気に走った。

風がものすごい速さで通り過ぎていく。

「ははっ、すげー。」

彼が笑いながら言う。

つられて私も笑った。

風が気持ちよくて、ふたりは笑いが絶えなくて、とにかく楽しかった。

私は彼の腰をギュッと掴んだ。

ふたりでいる時間が心地良くて、彼が愛しくて愛しくてたまらない。

ねえ、君が好きだよ。

その気持ちが、この力強く握った手で伝わればいいのに。

こんな時でも言葉にならない。

私の声にならない声は、風に紛れて横を通り過ぎていった。

坂を下り終えても、私たちの興奮はしばらく治まらなかった。
「すっごい早かったな。」

室岡くんが言った。

「なんかジェットコースターに乗ってるみたいだった。」

「この坂、無料で乗れるジェットコースターかも。」

そう彼が言つと、私達はまた笑った。

だんだんと陽も傾いてきた。

「そろそろ帰ろっか。」と言つ彼に、私は”うん”と言った。

彼の腰に手を回したまま、私達は帰路についた。

駅前の歩道橋近くで自転車が止まる。

もつと彼といたい

そんな風に思つたけど、それができないことくらいわかってた。

私は渋々と自転車を降りた。

「すんごい楽しかった。ありがとね。」

私は言った。

「どういたしまして。」と室岡くんが言う。

「じゃあね。」

そう言つて私は振り返った。

「あのさ、佐倉・・・」

歩道橋を上ろうとしていた私を、室岡くんが呼び止めた。

「なに？」と言つて、私は彼の方を向きなおした。

「・・・・・・・・」

彼は口を噤んでいる。

「気をつけて帰ろよ。」

そう言つて室岡くんは颯爽と行つてしまった。

私は、ずっと胸の奥にあったモヤモヤとしたものが、いつの間にか

無くなっていることに気づいた。

今はただ、室岡くんと過ごしたわずかな時間が楽しくて仕方なかったことしか思い浮かばない。

室岡くんの笑い声が、笑った顔が鮮明に浮かんで、それだけでいろんな事が上手くいきそうな、そんな気がした。

第28話 「友達以上、恋人未満。」

「え、室岡くん、彼女と別れたの？」

高校最後の夏休みを過ごしていたある日、朋ちゃんが家に遊びに来ていた。

「うん、そうみたい。」

私は言った。

「みたいって、これはチャンスだよ、理子。」

朋ちゃんが言う。

「チャンスじゃないよ。室岡くん、好きな人がいるって言ってたし。」

「え、そうなの？」

うん　と私が言うのと、朋ちゃんは”そっかあ”と言った。
少しの間ふたりで黙った。

しばらくして朋ちゃんが口を開いた。

「ねえ、それって理子のことなんじゃないの？」

「は？」

ベッドに座っていた朋ちゃんが、ベッドを背もたれにして床に座っていた私に近づいてきた。

「だから、室岡くんって理子のことが好きなんじゃない？」

「まさか。そんな事あるわけないじゃん。」

私は思い切り否定した。

「だって、仲いいじゃん。理子と室岡くん。」

朋ちゃんが言った。

「仲がよかったよ。室岡くんは私のこと友達としてしか見てないって。」

「そうかなあー？」

「そうだって。」

朋ちゃんも納得のいかないような顔をした。

室岡くんが私を好きなんて、そんな事あるわけがない。

彼にとって私はただの女友達で、それ以上になんてなれない。そんな、夢物語みたいな展開になんてきつとまらない。

私の想いは、きつと届かない

自分で自分に言い聞かせた。

期待をしてみれば、それがただの自惚れだったことに気づいた時、悲しくて悲しくてたまらないだろうから。

今年の夏休みは、一度も室岡くんに会っていない。

去年までは、美術部の課題製作のために何度か学校へ足を運び、そのうちの数回、同じように部活に来ていた室岡くんに会った。だけど今年は、部からひとつも課題が出ていない。

三年生は勉強や進路の方を優先してほしいということで、課題が出されるのは二年生までとなっている。

おかげで学校へ行く理由がひとつも無かった。

室岡くんを交えて遊ぶような計画もひとつも立っていない。

彼と会う機会は全くなかった。

メールだけは時々した。

『宿題進んでる？』とか、『毎日暑いよな。』とか、たいした話題じゃないけど、その瞬間だけは彼と繋がってるような気がした。だけど、やっぱりそれだけじゃ不満で、彼に会いたくて会いたくてたまらない。

あの声が聞きたくて電話をしようとしたけど、通話ボタンを

どうしても押せなかった。

あの笑顔が見たくて理由なく学校へ行こうとしたけど、空回りを
するのが恐くて止めた。

室岡くんに会いたい

会いたいって言いたい。ただと言えない

彼を恋しいと思う気持ちが募るだけの夏休みだった。

第29話 「朝の教室でふたりきり。」

始業式は月曜日だった

最後の夏休みも終わり、卒業までもうあと半年ほど。いつの間にか、随分と時が経っていた。

「宿題はちゃんと終わってるの？」

朝ご飯を食べている最中にお母さんが言った。

「終わってるよ。」と私が言う。

「姉ちゃん全然手伝ってくんねえんだもん。俺大変だったんだぜ。」隣で一緒にご飯を食べている弟が言った。

「遊び惚けてたアンタが悪い。」

そんな弟に対してキツイ一言を返すと、弟は「なんだよー」と言ってむくれた。

時計に目をやると、七時二十五分だった。

今日は月曜日。サッカー部の朝練はない。

たまにはちよつと遅くてもいいかそう思った。

「ごちそうさま。」

私は立ち上がってリビングを出た。

階段を上って二階の自分の部屋へ入ると、ボスツとベッドに勢いよく座り込んだ。

「ふう。」と一息ついてみる。

私は立ち上がった。

通学鞆に携帯を押し込み部屋を後にした。

階段を下りリビングの扉を開ける。

「じゃ、私行くから。」とだけ言っただけでその場を離れた。真っ直ぐ玄関へと向かい靴を履く。

「忘れ物ない？新学期早々呼びつけたりしないだよ。」

後ろでお母さんが言う。

「大丈夫だって。」

靴を履き替えて立ち上がった。

「行つてきます。」

「いつてらっしゃい」とお母さんが言う。

少し遅く行こうと思つたけど、なんだか落ち着かなかった。

やっと室岡くんに会える

それがとにかく嬉しくて、じつとなんてしていらなかった。

学校へ向かう私の足は軽やかで、まるで羽が生えているみたいだった。

下足場は当然のように静かで、下駄箱の扉を開け閉めする音や、内履きを下に落とす音が響いた。

靴を履き替えると、私は教室へと向かった。

廊下も階段も人氣が無くて、自分だけが独占しているみたいだった。

「ガラッ。」

私は教室の扉を開けた。

誰もいない。

机の横のフックに鞆を引つ掛けて椅子に座る。

そして私は窓を開けた。

朝の涼しい風が入り込んできて、気持ち良かった。

しばらく、窓から見える景色をボーッと眺めていた。

「ガラッ。」

突然扉の開く音がした。

私は最初、由美ちゃん came のだと思つた。

出入り口の方に視線をやると、私は思わず目を見開いた。

「あれ、佐倉じゃん。」

室岡くんだった

今日は朝練は無いはず。

こんな時間に会えるとは思わなかった。

一番最初に顔を合わせる人が、室岡くんだとは思ってもいなかった。
「相変わらず早いな。おはよ。」

彼は言った。

「おはよう。」

彼は机に鞆をドサツと置いた。

「なんか久しぶりじゃね？」

室岡くんが言う。

「うん、そうだね。」

彼の顔を一瞬でも見ただけで、会えなかった時の不安が一気に吹き飛んだ。

「俺さ、実はまだちょっと宿題残ってたよね。」

鞆の中を探りながら彼は言った。

「え、そうなの？ヤバイじゃん。」

「だから朝早く来てやろうと思ってたんだけど、佐倉がいてくれて助かったよ。」

私の方を見ながら彼が言う。

「頼む佐倉、一生のお願い。写させて!!」

両手を合わせて頭を下げながら彼は言った。
その姿が可笑しくて、私は笑ってしまった。

「ジューズ奢ってくれるならいいよ。」

私は言った。

「やったね!!じゃあ今即効で買ってくるよ。何がいい？」
「いちごオレ。」と私は言った。

” オツケー ” と言つて、彼は教室を出て行つた。

室岡くんが出て行つた後の教室は、最初のようにシーンと静まりかえっていた。

まるで室岡くんがいなかったかのよう。

もしかして、彼とさつき会つたのは夢で、本当は彼はまだ学校に来ていないんじゃないかって、そんな風に思えた。

「佐倉。」

名前を呼ばれた。

出入り口から室岡くんが歩いてくる。

「はい。これでよかった？」

私の席まで近づいてくると、冷えたいちごオレを差し出した。

「うん、ありがとう。」と言つて私は受け取つた。

「どれ写すの？」私が聞く。

「ああ、英語。」

私は鞆の中から英語の問題集を取り出し、「はい」と言つて彼に渡した。

「答え違つても文句言わないでよ。」

「間違えんなよ。」

「ええ！！」

そう私が言つと、彼は大きく笑つた。

教室中に彼の笑い声が響いて、近くに彼の笑う顔があつて、なんだかホツとした。

「じゃ、すぐ写すから。」

そう言つと、彼は私の席を横切つて、私よりも後ろの方にある自分の席へと戻つた。

第30話 「嘘なんてつきたくなかった。」

「夏休みは何してた？」

後ろの方から彼が聞いた。

「特には何もしてないよ。ずっと家でゴロゴロしてた。」

窓の外を見ているフリをして、彼の話言葉に言葉を返していた。ふたり以外この教室には誰もいないということに緊張して、後ろを向けなかった。

「学校には来なかったの？」

室岡くんが聞く。

「うん。今年は部から課題が出なかったから。」

そう私が言つと、彼は”そっか”と言った。

今、彼はどんな表情をしているんだろう

その答えを知りたくて後ろを向きたかったけど、できなかった。

「室岡くんは何してた？」

今度は私が聞いた。

「俺？俺はずっと部活だったよ。夏休み明けの試合が終わったら引退だからさ。」

私は”そっか”と言った。

「試合っていつあるの？」

「再来週の土曜日。」

「出るの？」

「出るよ。俺フオワードなんだぜ。」

「そうなんだ。」と私は言った。

彼のサッカーをする姿はどんななんだろう

「良かったら見に来る？」

後ろから彼が言った。

「え、いいの？」

私は思わず振り返った。

後ろで彼はただ笑っている。

ドキツとした。

「いいよ。再来週の土曜、ウチの学校のグラウンドで朝十時に試合開始だから、来れたら来ればいいよ。」

行っても行かなくても、どっちでも良いような感じに聞こえた。

「うん、じゃあ行けたら行くかも。」

私も曖昧な返事をした。

本当は絶対行くつもりでいたけど、上手く言えなかった。

そして私は、また窓の外を見るフリをした。

後ろから彼の、”うん”という声が聞こえた。

「よしっ、終わり。」

しばらくして後ろから彼が言った。

「佐倉、マジ助かった。サンキュー。」

そう言って室岡くんは席を立つ。

「はい、どうもありがとうございました。」

私の席まで来て、彼が問題集を差し出した。

「どういたしまして。」

そう言って私は彼から受け取った。

室岡君は振り返り、自分の席へと戻る。

その途中で、彼はふと足を止めた。

「あのさ、佐倉・・・」

私は思わず彼の方を振り向いた。

「なに？」

室岡くんは、少し下を向いていた。

彼が何を言いたいのか、私には全くわからなかった。

「お前、俺のことどう思ってる?」

突然室岡くんは言った。

どう思う? なんて、そんな質問の答えはひとつしかない。

私は、室岡くんが好きだよ。

喉のすぐそこまで出かかっているのに、声にまでならない。

私はまだ、あと一步の勇気が出せずにいた。

私は窓へと視線を移した。

彼を見ているのが辛かった。

すぐそこまで出かかっている気持ちが言えずにいる自分に、

無性に腹が立つ。

私は口を開いた。

「そんなの、友達に決まってんじゃない。」

窓を見ながら私は言った。

室岡くんは、静かに”そっか”と言った。

その声に、胸が軋むように痛んだ。

「室岡くんはどう思ってるの?」

窓に目を向けたまま私が言った。

少しの間、沈黙が流れた。

「友達だよ。」

しばらくして、呟くように言う彼の声が聞こえた。

ふうん と私は言った。

彼は立ち止まっていた足を動かし、そのまま教室を出て行った。

私は泣きそうになるのを、必死で堪えた。

”好き”と言えていたら、こんな気持ちにならなかったのだろうか。確かな気持ちはあるのに、どうしても勇気が出ない。

どうして言えないのか、自分でもわからない。

少しすると、教室に何人かの生徒が入ってきて、私はその中に埋もれた。

由美ちゃんと挨拶を交わし、何気ない話をした。

そして先生が教壇に立ち、一日が始まる。

あの後、室岡くんがいつ教室へ戻ってきたのか、私は確認せずにいた。

”友達だよ。”

そう言った室岡くんの声が胸を締め付ける。

そんなことわかってた。当然のことだと思ってた。

なのに、今こんなにも苦しい。

やっぱり私はどこかで期待してて、きっと自惚れていた。

由美ちゃんと話していても、胸の奥がズキズキと痛かった。

室岡くんが私のことを好きなんて、そんなこと絶対ない。

何かが音をたてて崩れるような感じがした

第31話 「崩れてしまったもの。」

崩れてしまったものはなんだろう
こんなハズじゃなかった。
こんなつもりじゃなかった。

昨日の始業式の朝の出来事が、録画したビデオのように何度も
何度も頭の中で再生された。
きつと、私と室岡くんの距離はこのまま縮むことはない。
友達のまま、あと半年ほどの高校生活を過ごし、そして卒業して
いくんだろう。
そんな風に私は思った。

今日もまた、下足場には人の気配が無い。
自分の下駄箱から内履きを取り出し、私は靴を履き替える。
今日は火曜日。サッカー部の朝練がある日。
室岡くんに会えるだろうか・・・
玄関を誰かが通ってくるような気配がした。
私は視線をやった。

「あ。」と心の中で言う。
室岡くんだった。
彼と目が合った。
フツと、室岡くんがすぐに反らした。
そのまま下駄箱へと近づいてくる彼。
「おはよう。」
私は言った。

「ああ、おはよう。」

室岡くんがポツリとした口調で返す。

そして彼は何も言わなかった。

靴を履き替えている最中、室岡くんは一言も話さなかった。

「バタン。」と彼が下駄箱の扉を閉める。

そのまま私を横切つて、体育館へと続く廊下を歩いて行つた。いつもなら「じゃあな」とか、「また後で」なんて言葉を置いていつて

くれるのに、今日はそれが無い。

踵をつぶした内履き、パタツパタツという靴音、あの後ろ姿。それらはいつもと何も変わらないのに、何かが違うと思った。何が違うのかは、わからなかった。

今朝の下足場での出来事を、私は一日中考えていた。

目を反らされたことが、あまり話さなかったことが、どれも些細なことで大したことじゃないのかもしれないけど、ひどく気になった。今日はたまたまそんな気分だったのかもしれない

前向きに思つてもみるけど、すぐに不安にかき消される。

何か、気に障るようなことを言つたのかも

だけどそれに思い当たることがひとつもなく、余計不安になった。授業中でも、お昼ご飯を食べている間でもその事だけが

思い浮かんで、こうして帰り道を歩いている今でも、私は上の空だった。

スツ　と、私の横を一台の自転車が通り過ぎる。

自転車は静かに横切り、そのまま私を追い越して行つた。

あの後ろ姿を、私が見間違えるはずがない。

いつもいつも、後ろ姿ばかり見ていたから

あの背中にしか、”好き”と言えなかったから

室岡くんの乗る自転車は、遠くへと消えていった。

私はそれを、ただ呆然と見ていた。

消えていく彼の後ろ姿を。

何も言わず、黙って通りすぎていった彼を見ているしか、私にはできなかった。

その夜、室岡くんにメールを送ろうと、携帯を開けたり閉じたりした。

メール本文記入の欄を表示画面に出して、取り消しボタンを押す。何度も何度もそれを繰り返した。

”今日の帰り、何で声かけてくれなかったの？”

そんなこと言えるわけがない。

彼にとって私は友達で、友達からそんな風に言われるのはおかしいと思う。

彼女だったら不自然じゃないだろうけど、私は彼女じゃないから。結局メールは送れず、私はベッドに仰向けに横になった。

上を見上げ、見えたのは天井じゃなくて室岡くんの後ろ姿。自転車に乗って遠ざかっていく彼。

いつもみたいに、後ろから声をかけてほしかった。

無言で横切っついていかれたことがショックだった。

それは彼にとって大したことじゃないのかもしれないけど、そう思うと余計胸が締め付けられて、涙が出た。

それ以来、朝の下足場で室岡くんと会わなくなった。

第32話 「ただ君に会いたい。」

もしかしたら、初めて室岡くんのことを知った時から、彼に惹かれていたのかも、と思う。

あの入学式の日に行われた、ホームルームでの自己紹介彼の声だけが耳に響いたのも、何か違うものを感じたのも全て、”好き”になる前兆だったのかもしれない。

ただの友達だと思ってた。

彼に彼女がいるってわかったとき、彼の彼女に嫉妬した。彼女が羨ましかった。

室岡くんが好きだということに気づいた

彼女がいるから好きだと言えなかった。結果がわかっている告白なんて、しても意味ないと思った。

今、彼は彼女と別れ誰とも付き合っていない。だけど、彼には好きな人がいる。

私達は、よく話し、よく笑ったりしたけど、それ以上にはなれない。私と彼の間にある微妙な距離。

それがふたりを創っていて、それがあからこそ私達は私達でいられるんじゃないだろうか。

上手く言い表せない関係

それにいつしか慣れて、それが当たり前だと思っていたのかも
しれない。

そんな関係を崩さないように、私はいつも必死になっていた。

ふと目が覚めて、枕元にある目覚まし時計を見ると、
八時五分前だった。

ベッドから降り、部屋を出る。

リビングの扉を開けると、お母さんが食器を洗っていた。

「おはよう。」

私が言った。

「あら、おはよう。休みなんだからもう少し寝ててもいいんじゃない？」

お母さんが言う。

「うん、でもなんか目が覚めちゃったんだ。」

冷蔵庫からレンジジュースのペットボトルを取り出し、
グラスに注いだ。

「裕也は？」と私が聞く。

「あの子なら、野球部の練習があるって言って、朝早く出掛けたわよ。」

ふうん　と私は言った。

椅子に座ってオレンジジュースを飲んでいると、お母さんが
焼きたてのトーストを出してくれた。

「ジャム、どれにする？」

「ピーナッツバターがいい。」

お母さんが、冷蔵庫からピーナッツバターの入ったパックを取り出し
渡した。

ピーナッツバターの甘い香りがリビングに広がる。

「あなたも部活？」

再び食器を洗い始めたお母さんが、その後ろで朝ご飯を食べている
私に振り向かず言った。

「うん……。」

曖昧な返事をこぼした。

トーストを食べ、オレンジジュースを飲み干し、ついでにヨーグルトまで口にした。

久しぶりに、のんびりと朝食をとったような気がした。

時計を見ると、八時四十分だった。

「ごちそうさま。」

使った食器を重ねて、流し台へと運ぶ。

「お昼はどうするの？」

隣で、洗った食器を布巾で拭いているお母さんが言った。

「まだ決めてないけど、午後までかかるようだったらコンビニに買いに行くよ。」

そう　とお母さんは言った。

「お母さん今日は仕事だから、お昼帰ってくるようななら、食べられそうなもの冷蔵庫に入ってるから、好きなの食べていいわよ。」

うん　と言って、私はリビングを出た。

ゆつくりと二階への階段を上る。

部屋に入り窓を開けた。

九月も中旬だというのに、夏の名残りのような暑さが広がる。外は良い天気だった。

ここ最近、室岡くんとは口をきいていない。

朝、火曜日でも木曜日でも、それ以外の曜日でも、室岡くんと下足場で会わなくなった。

教室でも廊下でも、偶然目が合うことがあってもすぐに彼に反らされてしまう。

メールも送られてこないし、私から送ろうとしても何を言えばいいのかわからず、結局堂々巡りを繰り返していた。

帰り道で声をかけてもらうどころか、姿さえも見ない。

何かが崩れてきているのだろうか

シャワーを浴びて部屋に戻ると、時刻は九時二十五分だった。私はしばらく時計を見つめた。

確か今日は

家着としてある服を脱ぎ、壁にかけてある制服に袖を通す。

必要最低限のものだけを鞆に詰め、私は部屋を出た。

階段を降りてリビングの扉を開けると、お母さんの姿はそこにはなかった。

居間を覗くと、掃除機をかけようとしていた。

「じゃあ行ってくる。」

私は声をかけた。

「あら、いつてらっしゃい。」

廊下を進み、玄関で靴を履く。

後ろから、掃除機の回る音が聞こえた。

私はそのまま黙って家を出た。

学校のグラウンドで朝十時から

その話をした時から、もう二週間ほど経っていた。

今日は、サッカー部の試合の日。

話を聞いたときから、絶対に見に行く決めていた。

休日でも彼に会えることが、楽しみだった。

それにもしきたら、どこか不安定な私達の関係も、修復

できるんじゃないかと思い、どこか期待を胸に私は学校へ向かった。

第33話 「恋に疲れた。」

グラウンドの入り口は、校門よりも進んだところにある。

私が着いた時、グラウンドには多くのサッカー部員が、試合直前の準備体操や体慣らしをしている様子だった。

それを見守る観客もまた、多く群がっていた。

観客は男女様々で、同じ制服を着た人もいれば別の学校の人もいる。グラウンドの端にはベンチが置いてあって、何人かサッカー部員が座っていた。

ベンチの真後ろは野球用のフェンスが張られていて、部員とフェンス越し

で話したりするのに最適な場所だった。

そのせいか、その場所は大勢の観客で埋まっていた。

フェンスの手前はすでに人だらけで、入り込む隙間も無い。

私は、フェンスから大分離れた所から室岡くんを探した。

彼はゴールのすぐ傍で、何人かの部員と話していた。

そんな彼を、案外あっさりと見つけられたことにひとり浮かれた。

「ピッ。」

笛を吹く音が鳴った。

試合開始の合図。

きっと彼は、今私がここにいることなんて知らないだろう。

頑張つて、室岡くん。

伝わらないことはわかってる。それでも私は心の中で叫んだ。

私が見ていたのは試合なんかじゃなかった。

走る彼を、ボールを追いかける彼をひたすら見ていた。
初めて、サッカーをしている彼を見た。

私には室岡くんしか見えなくて、ずっとドキドキしたままだった。
「ピッ」と、試合終了の笛の音が鳴る。

選手達が皆足を止めた。

どうやら前半戦が終わったらしい。

相手校と礼を済ませると、選手は散り散りになった。

部員に紛れた室岡くんが、ゆっくりとベンチへと向かってくる。
ベンチに腰を下ろした彼は、スポーツドリンクを勢い良く口へ
運んでいた。

そんな彼の近くに行きたいと思ったけど、ベンチを囲うかのように
人が群がっているフェンス前の光景を見て、少し溜め息が出た。
「頑張つて。」なんて、ありきたりな声援かもしれないけど、
その一言が言いたかった。

私はフェンスに近づこうとした。

踏み出そうとした足が、反射的に止まる。

フェンス越しに誰かと話す室岡くんが目に映った。

ベンチに腰掛けていた室岡くん。そのすぐ後ろで、

フェンスに手をかけながら話す女の子がいた。

着ていた制服は他の学校のもの。

胸がギュツとなった。

あの制服には見覚えがあった。

忘れもしない。私が、室岡くんを好きだと気づいた日。

校門でじゃれ合う室岡くんとその彼女を見て、胸が痛かった。

室岡くんはその子と別れたと言った。確かにそう言った
はずだった。

なのに

室岡くんとその子が今、フェンスを挟んで話している。
楽しそうに、仲良さそうに

なんであの子がここにいるの？

別れたんじゃないかったの？

フェンス越しに話すふたりを、私は離れた場所から見ていた。
しかなかった。

胸の奥が張り裂けそうに痛い。

こんな所にはいたくない

私は今すぐこの場所から逃げ出したくなった。
だけど彼から目が話せなくて、それでこんなにも苦しいのに、
どうしても足が動かない。

ふと、室岡くんがこっちを見た。

その瞬間、まるで金縛りが解けたかのように体が軽く感じ、
私は振り返って勢い良く走り出した。

グラウンドを出て、校門を通り過ぎ、それにさえも気づかない
ほど一目散に私は走った。

後ろを振り向くことも、気にすることもせず。
行き先なんてどこでもいい。

あの場所から抜け出せれば、それで良かった。

どれくらい走っただろうか。

息が切れて、額からは汗が吹き出している。

もうこれ以上は走れないくらいまで私は走った。

こんなにも死に物狂いで走ることは、体育祭のリレーでも
ないだろう。

気が付けば、帰り道から大分反れた土手沿いに私はいた。
立ち止まったまま、息を整える。

しばらくすると呼吸も落ち着き、私はゆっくりと歩き出した。
試合はどうなったんだろう

別れたはずの彼女が、室岡くんの出場するサッカーの試合を見に来ていたということは、もしかしたらヨリを戻したのかもしれない

そんなことはもうどうでもよかった。

涙が出た。

上手くいかない恋が苦しい。

縮まない距離が切ない。

”友達” 以上になりたかった。でも、くだらない事で笑い合ったり、ふざけ合ったりしているその瞬間が心地よくて、そんな関係を崩してしまうのが恐かった。

”好き” と言えないことが悔しかった。

何も変わってほしくないと言いながらも、何も変わらないままが悲しくて悲しくて・・・

そんな矛盾に、私はもう疲れてしまった。

もう、この恋に疲れた

友達のままだったら、こんな気持ちにならなかったかもしれない。彼のことを好きじゃなかったら、切なくも苦しくもならない。

室岡くんは友達

ただの友達

好きじゃない。室岡くんのことなんて何とも思っていない。
そんな風に言い聞かせてもみたけど、やっぱり好き。

私はやっぱり、室岡くんが好き

そしてまた、涙がこぼれた。

第34話 「出会えたことはきつと運命。」

月曜の朝、七時三十分になっても私はまだ朝食のパンを、のんびりと口へ運んでいた。

壁にかけてある時計に、極力目をやらないようにしながら。

「理子、時間いいの？」

お母さんが聞いた。

「うん。もう早く行くのめんどろになっただよな。」

私が言くと、”そう・・・”とだけお母さんは言った。

「ごちそうさま。」

カップと皿を重ねて流しのシンクに置くと、そのままリビングを後にした。

二階への階段を、いつもならいつもなら走るように駆け上がるのに、その日はまるで一段一段確かめるかのようにゆっくりと上った。

部屋に入って、ベッドに腰を下ろす。

窓の外に視線をやった。

良く晴れた青空に、うつすらと浮いている雲をぼんやりと見た。気が付くと八時になるうとしていた。

重たい腰をベッドから上げ、鞆を手に部屋を出た。

階段を降りリビングへ向かう。

「じゃ、行ってきます。」

「いつてらっしやい。」

このやりとりはいつもと変わらない。

玄関で靴を履き替え、私は家を出た。

学校へ行く道を歩いていると、何人かの同じ学校の人に

横切られたり、横切ったりした。

朝、学校へ向かう道で多くの生徒に紛れることは、高校に入って初めての経験だった。

下足場に着くと、靴を履き替えている最中の由美ちゃんに会った。

「由美ちゃん、おはよう。」

私は声をかけた。

「あれ、おはよう。理子ちゃん、今来たの？」

「うん。」

由美ちゃんは少し驚いたような表情をした。

「めずらしいね。理子ちゃんがこんな時間に来るなんて。」

「うん、なかなか起きれなくて……」

自分の下駄箱から靴を取り出し履き替える。

「そういう時つてあるよね。」

隣で由美ちゃんが言った。

靴を履き替え終わると、そのまま由美ちゃんと一緒に教室に向かった。

教室に入って何人かのクラスメイトと挨拶を交わすと、そのままクラスの生徒に紛れた。

室岡くんの姿を探したりはしなかった。

しばらくして彼が入ってきて、出入り口に目をやったりはしなかった。

そんな態度をとるために私は必死だった。

本当は、すぐにでも彼の顔が見たかった。

だけど、これ以上私のなかで室岡くんの存在が膨らんでも、きっと悲しいだけだろう。

切ない恋だった。なんて思い出で残したくはない。

これ以上好きにならないように抑え込む事で、綺麗な思い出として私の中に残ってくれるような気がした。

その日、私は一度も室岡くんに視線をやらなかった。

次の日の火曜日、私は昨日と同じくらいの時間に家を出た。先日の試合で、サッカー部の三年生は引退。その後の朝練は自由参加となるため、行っても行かなくてもいいという話を、

随分前に室岡くんから聞いていた。

彼は朝練に行くだろうか

もしかしたら、また決まった曜日には彼と下足場で会えるかもしれない。

だけど、今はもうそんな賭けすら私にはできない。
入学してまだ間もない頃を思い出した。

偶然早く行くことになった朝の学校の下足場で、初めて
室岡くんと話した。

翌日、サッカー部の朝練のない日、私は意味もわからず早々と
家を出て学校へ向かった。

今思えば、室岡くんに会いたかったのかもしれない。
静かな下足場に、私と室岡くんがいることが嬉しかった。

それはまるで、ふたりだけの秘密のようだったから。
あの日、教室に行かず体育館に足を運んだのも、室岡くんが
いるかもしれないと思ったから。

毎日毎日、朝早く学校に行っていたのも、ただ室岡くんに
会いたかったから。

とにかく好きで好きでたまらなかった。

初めて下足場で会った時も、クリスマスのプレゼントのことも、
帰り道で声をかけられた時も、全部偶然なんかじゃなくて
私はひとり運命を信じた。

室岡くんに会ったことは、運命だと思った。

第35話 「恋を綺麗な思い出に。」

その日の昼休みに、朋ちゃんに心境を話した。

朋ちゃんは、黙って私の話すのを聞いてくれた。

「理子はそれでいいの？あきらめちゃっていいの？」

朋ちゃんは言った。

「あきらめるわけじゃないよ。」

私は言った。

あきらめたわけじゃない

サッカーの試合に室岡くんと付き合っていた女の子が来ていて、

彼と楽しそうに話しているのを見た時は、胸が痛かった。

好きでいるのが辛いと思った。

でも嫌いになんてなれなくて、そう思おうとすれば余計、好きな気持ちだけが溢れた。

だから、好きだという気持ちは今も私の中にある。

でもそれだけ。ただ彼を好きなだけ。

これ以上恋に悩むのは嫌だった。傷つくのが恐かった。

それは逃げなのかもしれないけど、こんな恋の形もあるんじゃないかって思う。

そう朋ちゃんに話すと、彼女は「そっか」と言った。

「理子がそう決めたんなら、私はそれでいいと思うよ。」
朋ちゃんが言う。

「うん、ありがとう。」

そう私は言った。

出会ったことは運命でも、この恋は運命の恋じゃなかった。それでも、会えてよかったと思う。

いつもドキドキして、楽しくて、悲しいこともあったけど、悪いことばかりじゃなかった。

もしも、”好き”って言えるあと一步の勇気があったなら、こんな結末にはならなかったのだろうか？

だけど、”友達”というところにいたからこそ、あんな風に笑いあうことができたのかもしれない。

一緒に笑いあい、言葉を交わし、時には君に触れた。どれも全で一瞬の出来事で、だけどどれも永遠に感じられた。

好きになったのは高一のとき。

高三になった今でも、その気持ちは変わらないまま。

三年間、ずっと室岡くんのが好きだった。

気が付けば三年間も彼を好きでいた。

私はこの恋と供に、高校生活を過ごした。

いつか、時が経って、今を懐かしむときが来たら、私はきっとこの恋のことを思い出す。

そして”あんな事もあったなあ”って思ったりするのかもしれない。

おそらく一緒に思い浮かぶのは、室岡くんのあの声と、踵を

履き潰した内履きから鳴る、パタッパタッという音。

それからあの背中と、笑った顔。

私はそれらを思い出して、そっと微笑むことだろう。

綺麗なまま、穏やかな気持ちのまま、私は室岡君への恋をひとり、心の中のアルバムに仕舞った。

好きだよ、室岡くん。

私はアルバムに鍵をかけた。

第36話 「今日は卒業式。」

将来何になりたいか、なんて高三になってもちつとも
思いつかなくて、大学に行くほど勉強もしたくなかつたし、
かと言ってすぐに就職する気も無かつたので、とりあえず
自分の得意な分野に進学するのが無難だと思った。

私はデザイン系の専門学校に、すんなりと推薦で合格した。

三年間は本当にあつという間だった。

今日は卒業式

一・二年生の頃は式がとにかく長く感じて、ただ退屈なだけだった。
けれど自分達のための式となると、卒業証書をひとりひとりが
受け取る時間や、校長先生達の話がすごく意味のあるもの
に思えた。

「理子ちゃん、写真撮ろー。」

式のあとの最後のホールも済み、教室ではあちこちで
写真撮影が行われていた。

インスタントカメラを片手に、由美ちゃんが声をかけてきた。

「うん。」

由美ちゃんを交えたクラスの何人かと、入れ替わり何度も何度も
写真を撮った。

持ってきたインスタントカメラのフィルムはどんどん減っていき、
あとで朋ちゃんやさやかとも会うつもりでいたので、数枚

残して携帯のカメラに切り替えた。

おかげでメモリーは、その写真だらけになった。

写真を撮っている間、泣いて、笑って、そしてまた泣いてを繰り返した。

由美ちゃんと一緒に教室を出て、朋ちゃんのクラスに行くと、

「朋子、泣きすぎだよ。」と由美ちゃんが言う。

だってえ　　と言って、朋ちゃんは笑いながら、すでに赤くなり
すいぎている目からまた大粒の涙を流した。

そんな朋ちゃんを見て、私まで目頭が熱くなった。

三人でさやかのところに向かった。

さやかは大勢の女子生徒達の中でひたすら笑っていた。

だけど目はやっぱり赤かった。

さやかのクラスのひとりの女子生徒にシャッターを押してもらっ
よう頼むと、私達は四人で並んだ。

「こんな目で映るってちょっと嫌かも。」

朋ちゃんが言う。

「みんな似たようなもんだからいいんじゃない？」とさやかが
言うと、私達は一斉に笑った。

こんな風に四人で笑うのはきつと、一年生のとき以来だと思う。

何枚も何枚も四人での写真を撮って、インスタントカメラの
フィルムは、いつの間にかあと一枚だけになっていた。

なにかが頭を過ぎった。

私は、フィルムを一枚だけ残すことにした。

「みんなバラバラになっちゃうんだね・・・」

ふと由美ちゃんが言った。

春から、由美ちゃんは平本先輩のいる専門学校に、朋ちゃんは短大
に、

さやかは県外に就職が決まっている。

「あんまり会えなくなるね。」

私が言う。

同じ高校で、同じ場所にいつもいたのに、それぞれ別々の道を行
かなければいけない時がようやく来た。

そんな日が来ることを嫌だと思ったこともあったけど、どんなに嫌でも、そうしなければ誰も前に進めない。

そんな風に私も、いつしか思えるようになっていた。

「時々会おうね。連絡もしようね。」

と由美ちゃんが言うのと、自然と涙があふれた。

四人とも涙をこらえきれず、私達はひたすら泣いた。泣くに泣いて、四人で教室をあとにした。

下足場から玄関の外を見ると、大勢の下級生が待機していた。

卒業する三年生を最後に見送るために、長い時間待っているのだ。自分もああやって、先輩達を見送った。

下足場で靴を履き替えるのも、今日が最後。

そんなことを思いながら、私は靴を履き替えた。

玄関を出るとにかく人の波で、どう通り抜ければいいかわからないほどだった。

奥の方に美術部の後輩を見つけた。

後輩達も私に気づいたのか、大きく手を振っている。

「じゃあ、私ここで。」

私は言った。

「またね、理子ちゃん。元気だね。」と由美ちゃんが言う。

「うん、由美ちゃんもね。」

と私が言っ、また泣き出してしまった由美ちゃんを、肩を撫でながら私は宥めた。

「四月まで遊びまわろうよ。」

さやかが言った。

「メールするね。」と朋ちゃんが言う。

これが最後の別れじゃない。それだけを私は信じた。

「じゃあね、みんなまたね。」

そうやって私はみんなと別れた。

第37話 「さよなら。 ありがとう。」

美術部の後輩からは花束と、それぞれ一言ずつ言葉を
書いた色紙が渡された。

受け取った時からすでに目頭は熱くて、後輩の前で
泣くのは少し恥ずかしかったけど、我慢できず結局
涙があふれた。

卒業証書に卒業アルバム、後輩からもらった記念品。
両手いっぱい高校生活を終えた証を持って、私は
家への帰り道を歩いていった。

この道を歩くのも、今日で最後
見慣れた景色も思い出へと変わる。

学校から家までの一步一步が、とても愛しく思えた。

「佐倉！！」

うしろから声がした。

最初、誰だろう・とも思ったけど、こんな風に私のことを
呼ぶのはひとりしかない

足を止めて振り返った。

室岡くんが走ってくる。

いつもあるはずの自転車は無かった。

最後に室岡くんに会えてよかった。

さよならが言える

” 室岡くん、三年間仲良くしてくれてありがとう。”

”海に行ったり、クリスマスパーティーをしたり、自転車を二人乗りしたりと、本当に本当に楽しかった。”

”またいつか会えたら、その時も笑って過ごせるといいね。”

さよなら、室岡くん。今まで本当にありがとう

最後は”ありがとう”と言いたかった。

時が経って再び会えた時に、心から笑って会えそうな気がしたから。

「佐倉が帰っていくの見て、急いで追いかけてきたんだ。呼吸を乱しながら彼は言った。」

「私に何か用でもあるの？」

私は聞いた。

「俺、佐倉に、どうしても言いたい、事、が、あって・・・」

ハア、ハア　という息遣いを交えながら室岡くんが話す。

私が「なに？」と聞くと、室岡くんは”ちょっと待って。”と言って、頭を下げて息を整えた。

そんな彼の姿を、私はすぐ傍でただじっと見ていた。

しばらくして落ち着きを取り戻した彼は、ゆっくりと

頭をあげた。

そして真っ直ぐ私を見た。

少し照れくさかったけど、その目はあまりにも力強くて、私は目を反らせなかった。

室岡くんがゆっくりと口を開く。

今さら彼は、何を言うのだろう

「俺、佐倉が好きだ。」

第38話 「ずっと好きだった。」

室岡くんとは”友達”で、それ以上にはなれないと思ってた。どんなに想っても儚く散ってしまうとわかってたから、”好き”なんて言えなかった。

好きな人が、自分を好きになる
そんなのは夢物語だと思った。

「一年の時に話すようになって、ずっと気になってたんだ。
付き合ってた彼女と別れようと思ったのも、佐倉のことが好きだったからなんだ。」

私は呆然としながら彼を見ていた。
足が石になったみたいに動かない。

頭の中は混乱していて、いろんなものがグルグル回ってるみたいだった。

「嘘だ……。」

私は言った。

「嘘なんかじゃねえよ。」

彼が言う。

「俺は、ずっと佐倉が好きだった。」

そんな言葉が聞けるとは、思ってもいなかった。

真っ直ぐな目で私のほうを見て、室岡くんは言った。

今にも泣きそうになるのを、私はグッと堪えた。

何か言わなくちゃいけないのに言葉が出ない。声にならない。

「ごめん、やっぱり迷惑だよな。いきなりこんな事。」

彼は私から少し目を反らした。

そんな事ない。すごく嬉しい

だって私は、ずっとそんな日を夢見ていたんだから
言いたいことがあるのに言葉にならない。

こんな時でも、私は勇気が出せないの？

「それだけ言いたかったんだ。ごめんな、引き止めて。」
そう言うと、室岡くんがスツと私を横切っていく。

私は何も言っていない。

このままで本当にいいの？

私は自分に聞いた。

鍵をかけたはずの心のアルバムがそつと開く。

私は振り向いた。

「待つて!!」

少し離れた所で彼は立ち止まった。

抑えていた気持ち、涙と一緒にあふれる。

ゆつくりと室岡くんが振り返った。

涙で歪んで、彼の姿が上手く見えなくなっている。

「私も好き。」

初めて室岡くんに正面から好きって言った。

ずっと伝えられなかった気持ち、ようやく言葉にできた。

三年分の想いを込めて

彼の手が私の頬にそつと触れると、指で涙を掬った。

「私もずっと、室岡くんが好きだった。でも言えなかったの。
友達としてしか見られてないと思ってたから。」

涙で視界がぼやける。

突然、体がフワリと軽くなったような気がした。

気が付くと目の前に室岡くんの胸元があつて、私は彼の腕の中に閉じ込められた。

思わず、両手に抱えていた荷物が手から離れた。

耳のすぐ傍で、室岡くんの心臓の音が聞こえる。

それは驚くほど早く、とても愛おしかった。

「俺だって、友達としてしか見られてないと思ってたよ。」

上の方から室岡くんの声がする。

「いきなり話してくれなくなって、嫌われたかと思った。」

彼に抱きしめられたまま、私は言った。

「あれは、友達だって言われてすげーショックで、しかも俺もつい友達だって言つて後悔してたんだ。俺にとってはそうじゃなくても、お前にとって俺は友達なんだろうなって。」

「ごめんね、私、あんな事言つつもりじゃなかったの。」

なのに・・・」

また涙が出た。

「もういいよ。わかつたから泣くなつて。」

そう言つと、室岡くんが私の頭を優しく撫でた。

それだけでまた泣きそうになった。

「試合、見に来てくれてすげー嬉しかった。なのにいきなり帰るんだもんな。」

室岡くんが言った。

「だって、彼女だったコと話してたから、ヨリ戻したんじゃないかって思つて・・・。」

ハハハツと室岡くんが笑う。

「あいつの学校と試合してたんだよ、俺ら。それに、あいつの新しい彼氏もサッカー部で、そいつを見に来たんだってさ。」

そうだったんだ

あの時の不安が、悲しみが、一瞬にして溶けたような気がした。

「俺も、たぶん辛い思いさせたと思う。ごめん。」

私は大きく首を横に振った。

室岡くんの制服が汚れてしまう　そう思っても涙はとめどなくあふれた。

私を抱きしめる彼の力が、ギュツと強くなった。

嬉しくて愛おしくて、自然と手が彼の背中へと伸びた。

「なんか俺ら、かなり遠回りしたのかもな。」

室岡くんが言う。

「うん……。」

私達はずっと遠回りばかりしていた。だけどきつと、意味のある遠回りだったのだろう。

だからこそ今こんなにも彼が近くに感じる。

そのための遠回りだったのかもしれない。

そっと、私を抱えていた腕が解けていく。

第39話 「これからはふたりで。」

「泣くなよ。」と室岡くんが言った。

「だって……。」

そう言うと、彼は制服の袖で私の目元を拭った。

「汚れるよ……。」

そう言った私に室岡くんは、「もう着ないからいいよ。」と言った。

ずっとぼやけていた景色が鮮明になって、目の前にいる室岡くんのことも良く見えた。

彼は微笑んでいた。

なんだか恥ずかしい

「夢、見てるみたい。」

ずっと夢のような心地だった。

いつか覚めて、いつもの日常に戻るんじゃないかって。

ギュッ

室岡くんが私の頬をつねった。

「痛い。」と私が言う。

ハハハッと室岡くんが笑った。

「夢じゃないだろ。」

微笑みながら彼が言う。

私が見ているのは現実の出来事で、夢なんかじゃない。

なんだか可笑しくなって、ふたりで同時に笑った。

こんな結末になるなんて

室岡くんはまた私を真っ直ぐ見た。

「遠回りしてきた分、これからはふたりで並んで歩こう、理子。」

彼は言った。

私は”うん。”と言った。

室岡くんの顔が近づいてくる。

自然と私も目を閉じた。

ふたりの唇と唇がそつと重なった。

「そういえば、進路ってどうしたの？」

隣を歩く室岡くんに私が聞いた。

「理子と一緒にのこと。」

そんな彼の言葉に、思わず”えっ”と口に出す。

「なんでそこにしたの？」私は聞いた。

「俺も美術が楽しくて、もつと続けたくてさ。それでどうせなら一緒にどこ行きたいって思ってた。」

「よく私の行くところだったね。」

「井川に聞いた。」

そう彼は言つと、私の方を見て笑った。

私は愛しくて愛しくてたまらなくなつて、繋いでいる彼の手をギュッと強く握った。

こんな風に室岡くんと手を繋いで、室岡くんの隣を歩けるなんて、こんな時が訪れるなんてあの頃は思わなかった。

「ねえ、写真撮らない？」

私がふと言った。

「今？」と彼が言う。

「うん。ちょうど一枚残ってたの。」

そう言つて私は鞆の中からインスタントカメラを取り出した。

「じゃあ俺がシャッター押してやるよ。」

私は彼にカメラを渡した。

室岡くんが左手に持ったカメラを上高く掲げる。

右手は私と繋いだまま。

ふたりの頬と頬が寄り添う。

「いくよ。はい、チーズ。」

パシャ　という音がして、シャッターがきられた。

「ちゃんと写ってるかな？」

私が言う。

「俺が撮ったんだから大丈夫だって。」

そう言って室岡くんは笑った。

そんな彼につられて私も笑った。

もしかしたら、フィルムの残りがあと一枚になったと気づいたあの時過ぎった何かは、このためだったのかもしれない。

そんな風に私は思った。

心のアルバム鍵はどこかへ行ってしまった。

アルバムにしまう思い出が増えたから。

時には悲しいこともあるかもしれない。恋はきつとそういうもの。

だけど、彼とならいろんな事を乗り越えていけるような気がした。

今までは、私の室岡くんへの想いをしまってきた。

これからは、私と室岡くんふたりの想いが収められることだろう。

私達は手を繋いで、肩を寄せ合って、帰り道を歩いた。

私は、彼の彼女になれた。

第40話 エピローグ「運命の恋。」

専門学校に入学して、早くも一ヶ月が経とうとしている。知らない人たちばかりで最初は不安にもなったけど、今では友達もそれなりにできて結構充実している。

『聞いてよ理子、ひどいんだよ。洋輔ってば・・・』

朋ちゃんからの塚田くんに対する愚痴が延々と書かれたメールを、私は学校の玄関で立ったまま読み返していた。あのふたりも、しょっちゅう喧嘩はするものの、何とか仲良くやっているらしい。

そんな関係に少し懂れた。

私は返信メールを送った。

ポンツとうしろから頭を軽く叩かれた。

「お待たせ。」と彼は言う。

「遅いよ。」

「ごめんごめん、話が長引いてさ。」

そう彼が言っと、どちらからともなく自然とふたりの手は重なった。手を繋ぎながら、私達は学校の敷地内にある駐輪場へと向かった。

「さっき朋ちゃんからメールが来たよ。」

私は言った。

「井川のやつ、何だって？」と彼が言う。

「また喧嘩したんだって。」と私が言っと、彼は大きく笑った。

「理子、落ちんなよ。」

自転車の後部に座る私に向かって彼が言った。

「落とさないように漕いでよ、尚志。」

そう私が言っと、彼は”了解”と言ってペダルに足をかけてゆつくりと自転車が動き出した。

彼の腰に手を回して、彼の背中に頬をくつつけた。

私たちの通う専門学校は、地元の駅から電車で四つ目の駅を降りて自転車で二十分ほどのところにある。

駅まで電車で来て、駅から学校まではいつも、私は彼の漕ぐ自転車の後ろに座って通っている。

帰りも同じ。

彼の自転車に揺られながら、駅までの道を進んだ。

いつの間にか、彼のことを”尚志”と呼ぶようになった。

まだ少しぎこちなかったり、照れくさかったりするけれど、そんなこともまた愛しく思えた。

彼の腰に回していた手の力を強める。

「理子、苦しい。」

そう彼が言っていると、私は思わず笑った。

ふと、高一の時の担任だった平原先生の言葉を思い出した。

”神さまのいたずら”

あの日、神さまのいたずらで自己紹介をすることになった。

そのおかげで、彼の声に惹きつけられた。

だとすると、この恋も神さまのいたずらなのだろうか？

いたずらなんかじゃない。

これは運命。

この恋はきつと、運命の恋。

第40話 エピローグ「運命の恋。」（後書き）

非現実的で、ドラマのような漫画のような恋なんて、所詮は夢物語と思われがちかもしれないけど、この作品を通して、ありふれた日常の中でも運命的な、素敵な恋が見つけられる事が伝わればと思います。

ここまで読んでくださって本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5181c/>

高校生の恋。

2010年12月8日02時12分発行